

# 能越自動車道関連 埋蔵文化財包蔵地調査報告

N E J - 15  
(惣領野際遺跡)  
N E J - 16  
(惣領浦之前遺跡)  
N E J - 17  
N E J - 18  
正保寺遺跡  
粟原A遺跡  
中谷内遺跡  
中尾横穴墓群  
中尾茅戸遺跡

2003年3月

財団法人富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

# 序

能越自動車道(一般国道470号)は、富山県西部と石川県能登半島地域の高速交通体系の確立や沿線地域の活性化を目指し、北陸自動車道小矢部砺波JCTから高岡市、氷見市を通り、石川県輪島市に至る路線として計画されました。

当調査事務所では、この能越自動車道建設計画に伴い、平成4年度から発掘調査・遺物整理の事業を実施しております。発掘調査事業は、今年度までに五社遺跡・開豁大滝遺跡(小矢部市)・石名田木舟遺跡(小矢部市・福岡町)・地崎遺跡(小矢部市)・箕島遺跡・江尻遺跡(福岡町)・下老子笹川遺跡(福岡町・高岡市)・近世北陸道遺跡・手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡・堂前遺跡(高岡市)・中尾茅戸遺跡・中尾新保谷内遺跡・神明北遺跡(氷見市)の発掘を終了しました。

本書は、能越自動車道高岡北IC～氷見IC間に所在するNEJ-15・NEJ-16(氷見市懇領)・NEJ-17(氷見市矢田部)・NEJ-18(氷見市上久津呂)の埋蔵文化財包蔵地及び、正保寺遺跡(氷見市飯久保)・粟原A遺跡(氷見市粟原)・中谷内遺跡(氷見市中谷内)・中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡(氷見市中尾)における遺跡の範囲や、遺存状態を把握するために実施した包蔵地確認調査の結果をまとめたものです。その結果、路線内で、古墳時代・中世の懇領野際遺跡(NEJ-15)、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の正保寺遺跡・古代の粟原A遺跡、縄文時代・古墳時代・古代・中世の中谷内遺跡の一部を確認しました。調査の成果が、今後の遺跡調査や研究等の一助になれば幸いです。

最後に、今回の調査にあたり、格別のご協力とご配慮をいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年3月

財団法人富山県文化振興財團  
埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所  
所 長 桃 野 真 晃

# 例　　言

- 1 本書は平成14年度に氷見市飯久保・惣領・矢田部・上久津呂・栗原・中谷内・中尾地内の能越自動車道建設予定地で実施した埋蔵文化財包蔵地の調査報告書である。
- 2 調査は富山県教育委員会の決定に基づき、財團法人富山県文化振興財團が国土交通省からの委託を受けて実施した。
- 3 調査は財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が実施し、調査第二課長 酒井重洋が総括した。調査期間と調査員は次のとおりである。

NE J-15（平成14年5月27日～5月31日）

調査員 主任 越前慎子、文化財保護主事 野口雅美・長瀬 出・田中昌樹

NE J-16（平成14年6月3日～6月6日）

調査員 主任 越前慎子、文化財保護主事 野口雅美・長瀬 出・田中昌樹

NE J-17（平成14年7月17日～7月18日・9月24日～9月26日）

調査員 主任 越前慎子、文化財保護主事 野口雅美・長瀬 出・田中昌樹

NE J-18（平成14年6月18日～6月20日・10月30日～11月1日）

調査員 文化財保護主事 町田賢一・長瀬 出

正保寺遺跡（平成14年9月30日～10月25日）

調査員 文化財保護主事 長瀬 出

栗原A遺跡（平成14年6月25日～6月28日）

調査員 文化財保護主事 長瀬 出

中谷内遺跡（平成14年6月6日～6月18日・11月25日～12月3日）

調査員 主任 越前慎子、文化財保護主事 町田賢一・野口雅美・長瀬 出・田中昌樹

中尾横穴墓群（平成14年6月19日～7月5日）

調査員 主任 越前慎子、文化財保護主事 長瀬 出

中尾茅戸遺跡（平成14年11月19日～11月20日）

調査員 文化財保護主事 長瀬 出

- 4 発掘調査・資料整理・本書の作成にあたっては、下記の方々から御教示を頂いた。記して深甚なる謝意を表したい。(敬称略・五十音順)

安念幹倫・大野 究・高橋浩二・廣瀬直樹・山本正敏

- 5 本書の編集・執筆は全般を越前・長瀬が担当し、自然化学分析執筆は植木真吾（パリノ・サーヴェイ株式会社）が行った。執筆分担については各文末に記した。

- 6 実測及びトレースは越前・野口・長瀬・田中が行った。

- 7 造物の写真撮影は、調査第一課長 狩野 謙が行った。

- 8 貝類の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、報文を得た。

- 9 出土遺物及び記録資料は、当埋蔵文化財調査事務所が一括して保管している。

- 10 トレンチ一覧表には各層から出土した遺物の略号を記し、土壙自体を検出していない場合はーで示した。出土遺物の略号は次のとおりである。

縄土=縄文土器 塙土=古墳時代の土師器 土師=古代以前の土師器 須恵=須恵器

中土=中世土師器 土質=土師質土器 越瀬=越中瀬戸 伊万=伊万里 陶器=產地不明陶器

# 目 次

序

例言

目次

I 位置と環境 .....	1
1 位置と地形 .....	1
2 周辺の遺跡 .....	1
II 調査の経緯 .....	3
III 調査の概要 .....	4
1 N E J -15 (惣領野原遺跡) .....	4
2 N E J -16 (惣領浦之前遺跡) .....	7
3 N E J -17 .....	10
4 N E J -18 .....	13
5 正保寺遺跡 .....	15
6 粟原A遺跡 .....	19
7 中谷内遺跡 .....	21
8 中尾横穴墓群 .....	27
9 中尾茅戸遺跡 .....	28
IV 自然科学分析 .....	30
N E J -17埋蔵文化財包蔵地貝類の同定 .....	30
V 小括 .....	33
引用・参考文献 .....	35

## 図・表目次

第1図 調査地の位置	1	第19図 中谷内遺跡出土遺物	26
第2図 能越自動車道路線内の 押藏文化財包蔵地と周辺の遺跡	2	第20図 中尾横穴墓トレンチ位置図	27
第1表 既往の調査一覧	3	第9表 中尾横穴墓トレンチ一覧	27
第2表 NEJ-15トレンチ一覧	4	第10表 中尾茅戸遺跡トレンチ一覧	28
第3図 NEJ-15トレンチ位置図	5	第21図 中尾茅戸遺跡トレンチ位置図	29
第4図 NEJ-15出土遺物	6	第11表 NEJ-17 検出貝類の分類群一覧	30
第3表 NEJ-16トレンチ一覧	7	第12表 NEJ-17貝類同定結果	31
第5図 NEJ-16トレンチ位置図	8	第22図 今回の調査により 新たに確認された遺跡の位置	34
第6図 NEJ-16出土遺物	9		
第4表 NEJ-17トレンチ一覧	10		
第7図 NEJ-17出土遺物	10		
第8図 NEJ-17トレンチ位置図(1)	11	図版1 NEJ-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真	36
第9図 NEJ-17トレンチ位置図(2)	12	図版2 NEJ-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真	37
第5表 NEJ-18トレンチ一覧		図版3 粟原A遺跡・中谷内遺跡航空写真	38
第10図 NEJ-18トレンチ位置図	14	図版4 中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡航空写真	39
第6表 正保寺遺跡トレンチ一覧	15	図版5 NEJ-15	40
第11図 正保寺遺跡トレンチ位置図(1)	16	図版6 NEJ-15出土遺物	41
第12図 正保寺遺跡トレンチ位置図(2)	17	図版7 NEJ-16	42
第13図 正保寺遺跡出土遺物	18	図版8 NEJ-16出土遺物	43
第14図 粟原A遺跡出土遺物	19	図版9 NEJ-17・18	44
第7表 粟原A遺跡トレンチ一覧	19	図版10 正保寺遺跡	45
第15図 粟原A遺跡トレンチ位置図	20	図版11 粟原A遺跡	46
第8表 中谷内遺跡トレンチ一覧	22	図版12 中谷内遺跡	47
第16図 中谷内遺跡トレンチ位置図(1)	23	図版13 中谷内遺跡	48
第17図 中谷内遺跡トレンチ位置図(2)	24	図版14 中谷内遺跡出土遺物	49
第18図 中谷内遺跡トレンチ位置図(3)	25	図版15 中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡隣接地	50

## 写真図版

図版1 NEJ-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真	36
図版2 NEJ-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真	37
図版3 粟原A遺跡・中谷内遺跡航空写真	38
図版4 中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡航空写真	39
図版5 NEJ-15	40
図版6 NEJ-15出土遺物	41
図版7 NEJ-16	42
図版8 NEJ-16出土遺物	43
図版9 NEJ-17・18	44
図版10 正保寺遺跡	45
図版11 粟原A遺跡	46
図版12 中谷内遺跡	47
図版13 中谷内遺跡	48
図版14 中谷内遺跡出土遺物	49
図版15 中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡隣接地	50

# I 位置と環境

## 1 位置と地形（第1図）

水見市は、富山県北西部に位置し、三方を石動丘陵・宝達丘陵・二上丘陵に囲まれ、東は富山湾に面している。宝達・二上の両丘陵から派出した小丘陵が谷間に小冲積平野をつくりており、能越自動車道建設予定地は丘陵と小冲積平野を南北に縱断して走っている。

今年度包蔵地確認調査を行った飯久保地内の正保寺遺跡、慾領地内のNEJ-15・16、矢田部地内のNEJ-17、上久津呂地内のNEJ-18、栗原地内の栗原A遺跡、中谷内地の中谷内遺跡は、仏生寺川とその支流である万尾川と中谷内川によって開析された十三谷平野と、平野に向かって舌状にのびる丘陵上に点在する。中尾地内の中尾横穴墓・中尾茅戸遺跡は、上庄川流域に開けた上庄谷平野南縁の丘陵裾部に所在する。

## 2 周辺の遺跡（第2図）

調査対象地周辺は、丘陵と平野が入り組んだ地形となっており、平野部は集落跡を主体とし、丘陵上には古墳群や中世の山城跡が多くみられる。

正保寺遺跡・NEJ-15・16の周辺には、平野部に慾領古墳、丘陵上に光西寺古墳群・寺飯久保古墳群があり、古墳時代から古代の遺跡として慾領遺跡・慾領B遺跡がある。中世には正保寺遺跡に隣接して、狩野中務が築いたと伝えられる飯久保城跡がある。山麓の飯久保の集落は「城の下」と称し、「鍛冶屋町」の地名が残る。「越中志微」によると、狩野氏は戦国期には鞍骨山城、飯久保城、慾領砦を構え、一帯を領したとされる。その他に神代城跡、堀田城跡等の山城が丘陵の尾根に密集している。飯久保後山遺跡は、縄文・弥生時代の散布地で、近世の塚もある。

NEJ-17が所在する矢田部地区周辺では、丘陵裾に中世の散布地である矢田部六反坪遺跡・矢田部ナカタ遺跡等がある。

NEJ-18・19・栗原A遺跡周辺には、古くは縄文・古墳時代の散布地である上久津呂ゴダンダ山遺跡がある。古墳から古代の遺跡としては、平野部に上久津呂A・B遺跡等があり、中世には丘陵上の上久津呂城跡や、丘陵裾に上久津呂C遺跡の中世墓等がある。

栗原A遺跡から小丘陵を隔てた北側には、中谷内遺跡が丘陵裾部から平野部にかけて広がっており、さらに北側の丘陵を越えた裾部に中尾茅戸遺跡・中尾横穴墓（推定地）がある。周辺には、縄文時代の遺跡として丘陵上に荒館B遺跡、平野部に大野沢遺跡がある。弥生時代の遺跡としては丘陵裾部に鞍川横羽毛遺跡、平野部に沖布A遺跡、谷部に坂津B遺跡があり、古墳時代には合計37基の古墳が群集する泉古墳群・泉往易古墳群がある。古代には、平野部に大野南遺跡・泉中尾庵寺等があり、丘陵上には炭焼窯状遺構のある中尾山田遺跡がある。また、大野周辺は「和名抄」にみえる射水郡の十郷のひとつ、阿努郷に比定される。平安時代中期には源家賢が私領阿努庄とし、12世紀中頃に押関家近衛家領として伝領された。中世には、千久里山上に鎌倉・室町時代の千久里城跡や、山中に祭祀遺跡である千久里岩屋堂遺跡、大量の埋納銭が出土した中尾ガメ山遺跡等がある。



第1図 調査地の位置



第2図 能越自動車道路線内の埋蔵文化財包蔵地と周辺の遺跡（1：50,000）

1. 惣領古墳
2. 光西寺古墳群
3. 寺越久保古墳群
4. 惣領遺跡
5. 惣領B遺跡
6. 館久保城跡
7. 惣領砦
8. 神代城跡
9. 堀田城跡
10. 矢田部六反坪遺跡
11. 矢田部ナカタ遺跡
12. 上久津呂ゴジダ山遺跡
13. 上久津呂A遺跡
14. 上久津呂B遺跡
15. 久津呂城跡
16. 上久津呂C遺跡
17. 荒船B遺跡
18. 大野沢遺跡
19. 犬川横羽毛遺跡
20. 冲布B遺跡
21. 板尾B遺跡
22. 泉古墳群
23. 泉往易古墳群
24. 大野南道跡
25. 泉尾庵寺跡
26. 中尾山田遺跡
27. 千久里山城
28. 千久里岩屋堂遺跡
29. 中尾ガメ山道跡

## II 調査の経緯

### 1 調査の契機と既往の調査（第1表）

能越自動車道（一般国道470号）は、富山県西部・能登地域の高速交通体系の確立及び地域活性化のため昭和62年の高規格幹線道路計画の一環として、石川県輪島市から富山県砺波市に至る延長約100kmの自動車専用道路として計画された。平成2年にこの工事計画を受け、国土交通省（以下、国土省）富山工事事務所・県教育委員会（以下、県教委）・小矢部市教育委員会で協議が行われ、小矢部市域の分布調査を行なうことが決定した。また、平成4年度からは当財団が国土省から委託を受け発掘調査を実施している。これ以降、能越自動車道関連の調査は、分布調査を県教委、確認調査を地元市教育委員会及び当財団、本調査を当財団が主体となり平成4年度から継続して実施している。

### 2 調査に至るまで

平成12年3月、県教委により能越自動車道高岡IC～氷見IC間（氷見高岡道路）の分布調査が実施された。その結果、NEJ-13・14・15・16・17・18・19・20・21の9箇所の埋蔵文化財包蔵地と1箇所の埋蔵文化財包蔵推定地を新たに確認するとともに、板屋谷内B古墳群、板屋谷内C古墳群、中尾横穴墓群、中尾坊田遺跡、中尾新保谷内遺跡、飯久保城跡、正保寺遺跡、中谷内遺跡、栗原A遺跡の9箇所の周知の遺跡範囲を再確認した。

平成13年度、国土省の委託を受けて、当財団はNEJ-13・14・20・21、中尾新保谷内遺跡・中尾坊田遺跡の調査を行った。その結果、五十里沼田遺跡・堂前遺跡・神明北遺跡・大野江淵遺跡を新たに確認するとともに、中尾新保谷内遺跡（中尾坊田遺跡は中尾新保谷内遺跡に統合）の範囲を確認した。

平成14年4月19日、富山工事事務所において、国土省と財団の協議が行われ、昨年度より要望のあつた高岡北IC～氷見IC間のNEJ-15・16・17・18・19埋蔵文化財包蔵地、板屋谷内B・C古墳群、正保寺遺跡、栗原A遺跡、中谷内遺跡、中尾横穴墓、中尾茅戸遺跡隣接地のうち、用地買収が終了しているNEJ-15・16・17（うち平野の一部）・18（うち平野部）、栗原A遺跡（うち山地部）、中谷内遺跡、中尾横穴墓群の包蔵地確認調査を早期に実施してほしいとの要望があった。これを受けて財団は5月27日から7月18日にかけて包蔵地確認調査を行った。

平成14年9月9日、県庁において、県教委、国土省、財団の協議が行われ、ボックス工事にかかるNEJ-18（うち山地部）、トンネル坑口にあたる正保寺遺跡のほか、買収の終了したNEJ-17（平野部の残り）、中谷内遺跡（北側拡張部分）、中尾茅戸遺跡隣接地の包蔵地確認調査を今年度中に終了してほしいとの要望があった。これを受けて財団は9月24日から12月3日にかけて包蔵地確認調査を行った。

年度	既査対象地	調査種別	調査主体	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	既査結果
平成12	高岡北IC～氷見IC	分布	課税委	630,000	3/22～3/29	NEJ-15～21・埋蔵文化財包蔵推定地を設定 板屋谷内C古墳群・中尾横穴墓群・堂前遺跡・ 中尾茅戸遺跡隣接地・正保寺遺跡・中谷内遺跡・ 栗原A遺跡を確認
平成13	氷見高岡道路	本査査	財團	8,002(延17,514)	5/22～12/19	古代・中世の集落&墓市
	唐手向糞田遺跡	本査査	財團	10,839(延12,435)	5/22～11/30	縄文時代初期より、古代・中世の集落を調査
	NEJ-13	既査対象地	財團	189(延14,570)	6/16～6/17	五十里沼田遺跡を設定
	NEJ-14	既査対象地	財團	90(延3,700)	7/30～7/31	堂前遺跡を設定
	NEJ-20	既査対象地	財團	882(延16,100)	10/25～10/29	中尾茅戸遺跡を設定
	NEJ-21	既査対象地	財團	4,194(延39,710)	10/9～10/29	神明北遺跡・大野江淵遺跡を認定
	壁野遺跡	本査査	財團	834(延1,688)	10/22～12/11	縄文時代中期～後期の集落の、古代の集落を調査
平成14	神明北	本査査	財團	3,120	1/3～8/26	古代・中世の集落を調査
	中尾茅戸内	本査査	財團	9,377(延13,077)		古墳・古代・中世の集落を調査
	中尾茅戸跡	本査査	財團	1,236		古代の集落を調査

第1表 既往の調査一覧

\*平成11年度以前の調査については、財団法人富山県文化振興財團1998・2001「能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告」を参照されたい。

### III 調査の概要

#### 1 N E J-15埋蔵文化財包蔵地（惣領野際遺跡）

##### (1) 調査対象地（図版1・2）

N E J-15は、仏生寺川によって開析された十三谷とよばれる谷底平野に位置し、仏生寺川の支流である鞍骨川を挟んで北はN E J-16埋蔵文化財包蔵地となっている。現況は、水田である。標高は北端で約7.8m、南端で約8.4mを測り、南の丘陵に向かって緩やかに高くなっている。

##### (2) 調査の方法（第3図）

幅約1.65m・長さ約20~50mのトレント（以下Tとする）を15箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遣構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は16,950m<sup>2</sup>、調査面積は1,064m<sup>2</sup>である。

遺跡の範囲は、調査の進展に伴って、当初埋蔵文化財包蔵地と推定されていた範囲を超えて南へのびることが予想されたため、南方へ向かって調査範囲を拡張した。

##### (3) 基本層序

I a層	現耕作土	黄灰色シルト（I b層と合わせて約50cm）
I b層	盛土	灰色粘土
II 層	中世包含層	白色粘土混灰色粘土質シルト（約20cm）
III 層	中世遣構面・古墳包含層	灰色粘土（約30cm）
IV 層	古墳遣構面	灰色粘土

##### (4) 調査の状況（第2表、第3図、図版5）

第1遣構面（III層）では、中世の遣構（柱穴・溝・土坑）を検出した。遣構、遺物ともにT 8~11に集中しており、その付近に主体があると考えられる。

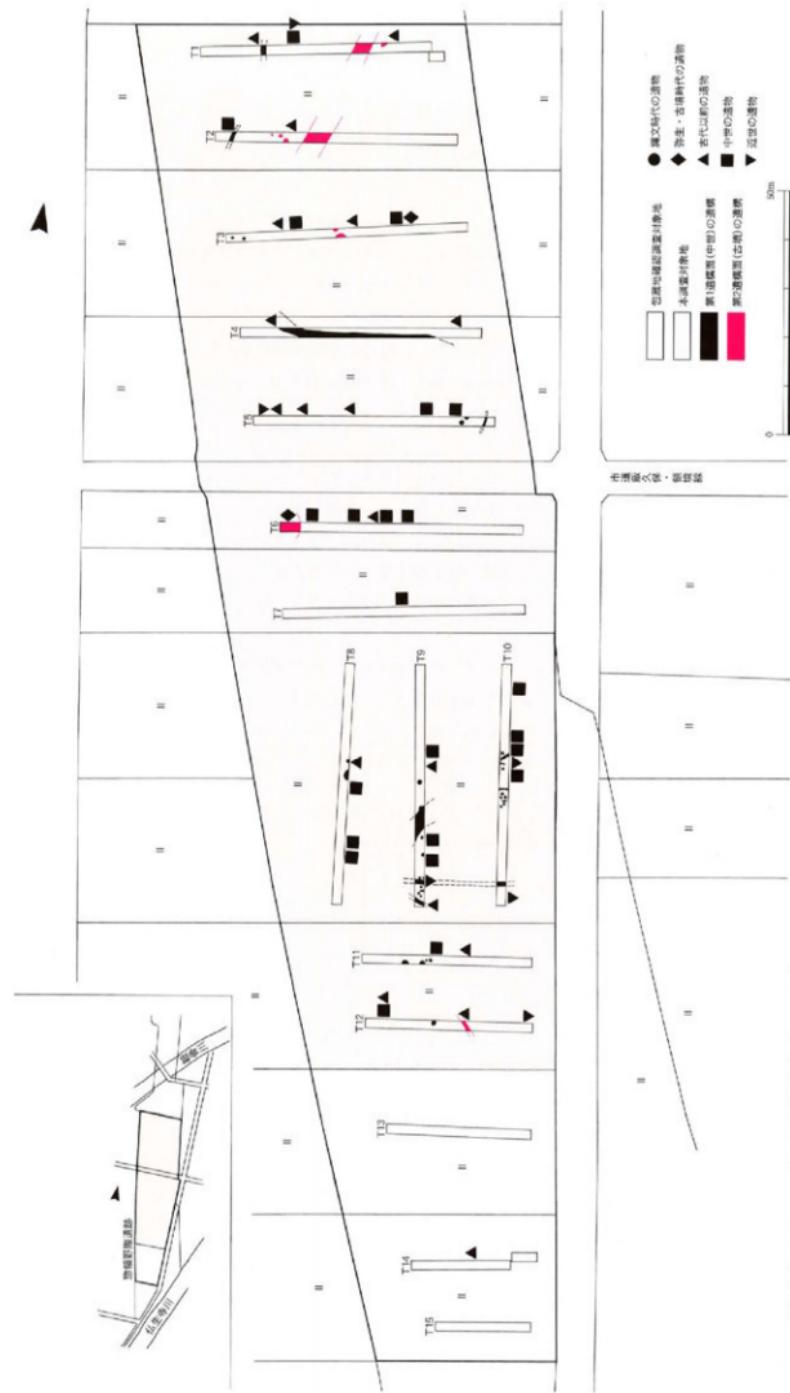
第2遣構面（IV層）では、古墳時代の遣構（堅穴住居？・溝・土坑）を検出した。数としては少ないが、これは第1遣構面で遣構を検出した部分では深掘りを行っていないことにもよる。6 Tの西端では遣構埋土と考えられる層から古墳時代の土師器が大量に出土しており、平面形は確認していないが堅穴住居の可能性がある。第2遣構面の地表からの深さはT 1で約1.6m、T 3・6で約1m、T 12で約0.8mと、南方に向かうにつれやや高くなっていくようである。

地震痕跡として噴砂も検出されている。少数であるため具体的な地震年代は明らかにできないが、確認した噴砂は中世遣構面まで上がり、中世包含層を突き抜けるものはない。また、溝等の遣構の埋土が地震のために乱され、平面形が歪んだと考えられるものがT 9付近で多く見られた。

トレント番号	全長(m)	遺構深度(m)	I層	II層	III層	IV層	遺構
T 1	50	1.60(Ⅳ層)	土師・越前・伊万	須恵			穴2・溝2
T 2	50	0.8(Ⅳ層)	珠洲				穴3・溝2
T 3	50	1.0(Ⅳ層)	珠洲・越前・陶器	土師	須土		穴4
T 4	50	1.0(Ⅳ層)	須恵・土師				窓1
T 5	50	0.7(Ⅲ層)	須恵・土師・伊万	土師		—	穴2・窓1
T 6	50	0.8(Ⅳ層)	珠洲				堅穴住居？(古墳土)
T 7	50	1.0(Ⅳ層)	珠洲・青磁・越前				穴1・噴砂
T 8	50	0.8(Ⅳ層)		土師・珠洲	珠洲		溝？1
T 9	50	0.9(Ⅳ層)	須恵・珠洲・青磁・伊万里				穴11・溝4
T 10	50	0.6(Ⅲ層)	珠洲・白磁・伊万・唐津・磁石・鐵	珠洲・青磁・鐵津		—	穴9・溝3
T 11	35	0.9(Ⅳ層)		須恵	土師		穴4
T 12	35	0.8(Ⅳ層)	須恵・土師・中土		須戸		穴1・窓1
T 13	30	—				—	
T 14	25	—	須恵・土師	—	—	—	
T 15	20	—	—	—	—	—	

第2表 N E J-15トレント一覧

第3図 NEJ-15トレンチ位置図（1:1000）



#### (5) 出土遺物 (第4図、図版6)

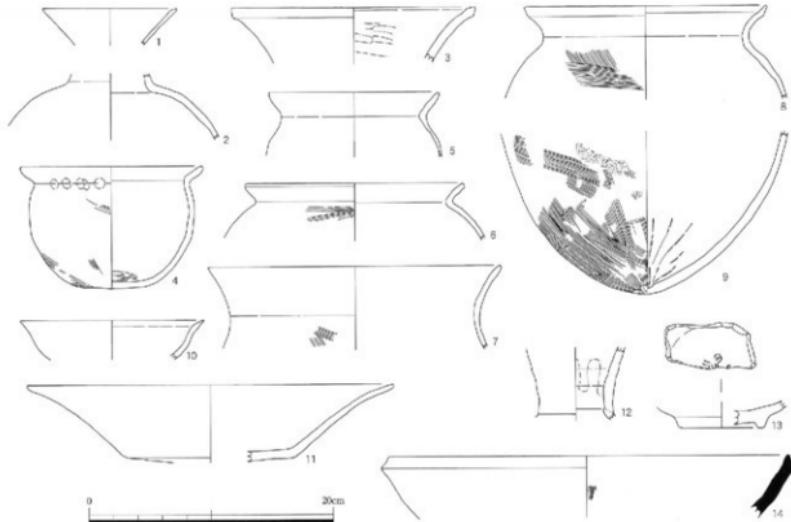
遺物は、土師器（古墳時代）、土師器（古代）・須恵器、中世土師器・珠洲・青磁・瀬戸、伊万里・唐津・越中瀬戸、銘（近世）、砥石、鉄滓が出土した。

1～11は古墳時代の土師器である。1～4は壺である。1は小型の壺で口縁は外方へ開く。2は球胴の壺の肩部で摩滅が著しい。3は大型の壺の口頸部で、端部外面に面をとり、内面はミガキを施す。4はややつぶれた球胴の壺で、頸部外面に指頭圧痕、体部内外面にハケメが残る。5～9は壺で、「く」の字状口縁を呈する。7は頸部がゆるくくびれる形態で、外面はハケメを施し、煤が付着する。10は楕で口縁部は外反する。11は高坏の坏部で、外反し下端に棱をもつ。12は瀬戸壺の頸部である。外面には灰釉がかかる。13は中国製青磁の碗である。内面及び外面の高台部分まで釉がかかり、見込みには型押し文を施す。14は、珠洲擂鉢である。口縁部は上部につまみ上げる。13世紀前半頃のものである。

#### (6) 調査の結果 (第3図)

第1遺構面では中世、第2遺構面では古墳時代の遺構が検出された。なお当初の調査予定範囲より南方に遺跡の延長が認められ、遺跡の範囲を拡張した。本調査対象面積は、14,200m<sup>2</sup>で、2面あるため延べ面積は28,400m<sup>2</sup>である。遺跡の名称は付近の字名から惣領野際遺跡とした。

当遺跡の近辺には、周濠をもつ2基の円墳と推定されている惣領コツデラ古墳群、仏生寺川の改修工事で地表下約3mから古墳時代中期の遺物が出土した惣領遺跡、埋葬主体部砾床及び直刀・管玉・ガラス小玉・須恵器を検出し6世紀後半以降の築造とされる惣領古墳群など古墳時代の遺跡が多い。また、今回の調査で、隣接するNE J-16では当遺跡よりやや時期が遅る弥生時代終末～古墳時代前半の遺構面を確認した。今後、これらの遺跡調査によって仏生寺川上～中流域の丘陵先端部から平野部における開発過程の解明がなされるであろう。



第4図 NE J-15出土遺物 (1 : 4)

T3 (10) T6 (1~9・11) T8 (14) T9 (13) T12 (12)

## 2 N E J-16埋蔵文化財包蔵地 (惣領浦之前遺跡)

### (1) 調査対象地 (図版1・2)

N E J-16は、仏生寺川によって開析された十三谷とよばれる谷底平野に位置し、南は仏生寺川の支流である鞍骨川を挟んでN E J-15埋蔵文化財包蔵地となっている。北側は石動丘陵から派出した小丘陵に接している。現況は田地である。標高はT 4が最も高く約8.4mを測り、T 1では約7.5mと、山側から平野側にかけて約1mの高低差がある。T 10では約7.6mで、東方へ向かっても低くなっている。

### (2) 調査の方法 (第5図)

幅約1.65m・長さ約35~70mのトレンチを10箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構面及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は10,200m<sup>2</sup>、調査面積は767m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序

I a層	表土	黄灰色シルト
I b層	盛土	灰色粘土質シルト
I c層	旧河川埋土	灰オリーブ色粘土質シルト
II層	古代・中世包含層	灰色粘土質シルト(0cm~約40cm)
III層	古代・中世遺構面、古墳・縄文包含層	オリーブ灰色粘土質シルト(約30cm)
IV層 T 3	縄文遺構面	にぶい黄褐色粘土
T 4・9	古墳遺構面	灰色粘土質シルト

II層はT 2では約40cmの厚さがあるが、T 3~8では15~30cmで、T 6・9・10では削平を受けて残っていない。III層はT 3・4・9で、30cm前後の厚さを確認している。

T 1では、鞍骨川の河川改修を行った際の埋土と思われる層が1.6m以上堆積しており、県道以南に遺跡の広がりは認められなかった。調査区中央には東西方向の旧河川埋土と考えられる層(I c層)が表土下で検出された。この埋土は深いところでは2.4m以上あり、遺構面は削り取られている。

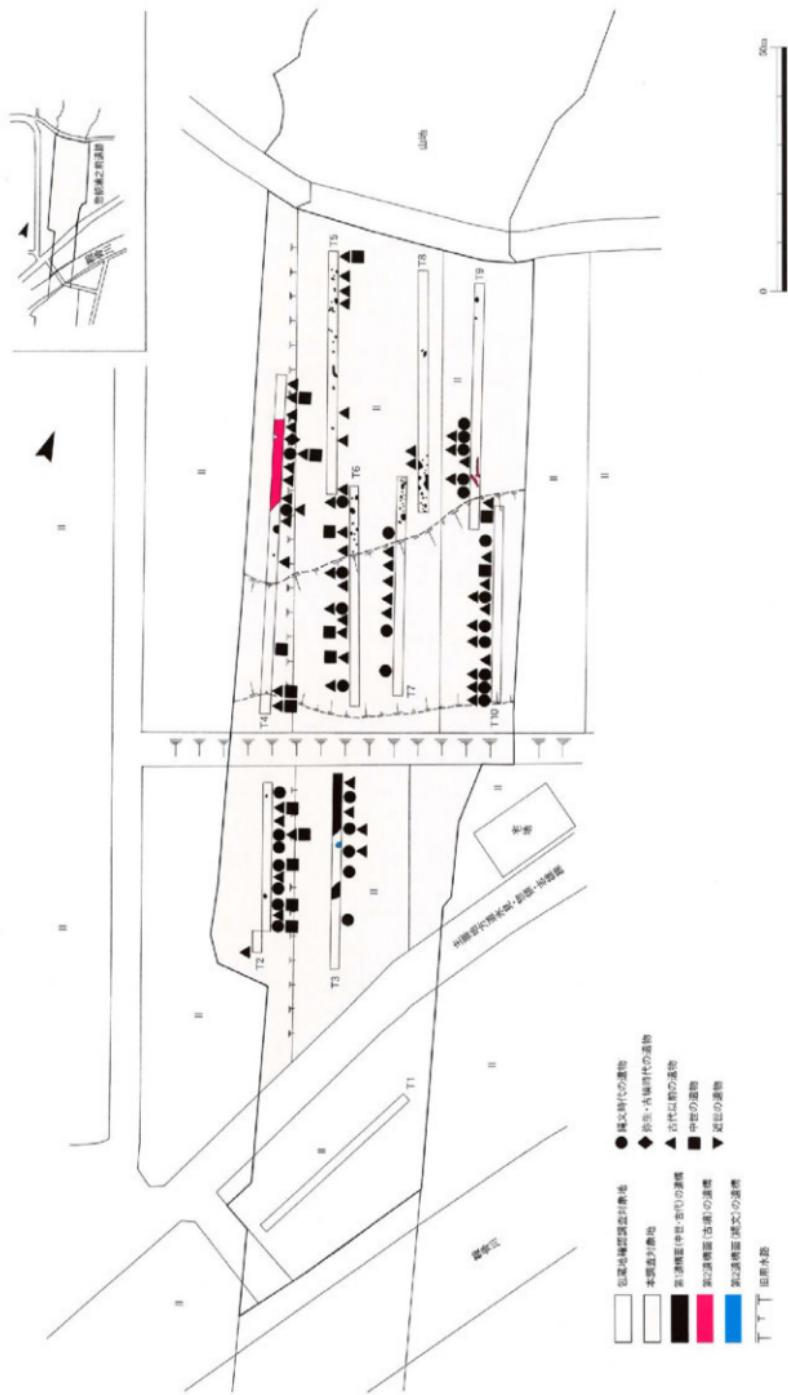
### (4) 調査の状況 (第3表、第5図、図版7)

第1遺構面(III層)では、古代と中世の遺構(柱穴・溝・土坑)を検出した。特に旧河川より北側の山裾部分に遺構が集中していた。

第2遺構面(IV層)では、平野側のT 3で縄文時代の遺構(土坑)、山側のT 4・9で古墳時代の遺構(溝・土坑)を検出した。縄文時代の遺構はT 3で土坑を1基確認しただけであるが、T 2・3の包含層から縄文土器の破片が多く出土している。詳細時期を決定できる破片はほとんどないが、中期中葉のものが1点ある。古墳時代の遺構は旧河川より北側で検出した。T 4の北側では遺構と思われる落ち込みを確認し、古墳時代の土師器が多く出土したが、T 5では全面を第2面まで掘り下げていないため、遺構のつながりは不明である。

トレンチ番号	全長(m)	遺構面深度(m)	I層	II層	III層	IV層	遺構
T 1	40	—	—	—	—	—	—
T 2	35	0.3(III層)	埋土・溝	縄土・土師・須恵・洼溝・書板	圓土・土師	—	穴2(土師)
T 3	40	0.8(IV層)	埋土・土師	—	縄土・土師	埋土	谷1(埋土・土師・須恵)・穴3(埋土)
T 4	70	0.8(IV層)	埋土・土師・須恵・中土・珠溝	圓土・土師・溝	埋土・土師・須恵	—	溝2(埋土・須恵・珠溝)・穴3
T 5	50	0.4(III層)	土師・須恵・珠溝	土師	—	—	穴17(土師)
T 6	45	0.3(III層)	縄土・土師・須恵・珠溝・陶器	—	—	—	穴13(縄土・土師・須恵)
T 7	45	0.3(IV層)	土師・須恵	—	—	—	穴31(縄土・土師・須恵)
T 8	50	0.2(III層)	須恵	土師	—	—	穴40(須土・土師)
T 9	50	0.6(IV層)	縄土・土師・須恵	—	縄・須恵・土師	—	須2(土師)・穴3
T 10	40	—	縄土・土師・須恵・珠溝	—	—	—	—

第3表 N E J-16トレンチ一覧



第5図 NEJ-16トレンチ位置図 (1:1,000)

## (5) 出土遺物 (第6図、図版8)

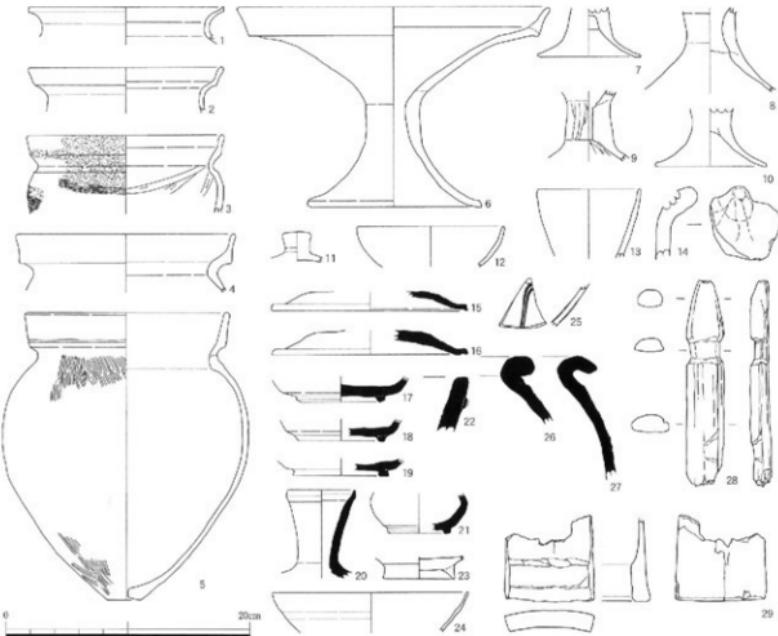
遺物は、縄文土器、土師器（古墳時代）、土師器（古代）・須恵器、中世土師器・珠洲・青磁・越中瀬戸が出土した。

1～14は弥生終末期～古墳時代前期の土器である。1は「く」字状の口縁で縁部に面をとる。2は受け口状口縁の甕。3～5は有段口縁の甕で、3・5は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。6・8・9は器台である。7・10は高坏の脚部である。11は蓋のつまみ部分である。12は挽である。13は壺の口颈部である。14は把手である。上部と下部は欠損しており、胎土は粗い。15～22は須恵器である。17～19は高台坏である。20は長頸壺である。21は小型壺の体部である。22は外面口縁部直下に帯状の突帯を貼り付け口縁部から突帯までの間に平行叩きを施す。内面は口縁部直下より同心円当て具を施す。23は土師器高台挽底部である。24は土師器挽である。25は青磁碗である。26・27は珠洲甕である。26は13世紀後半から14世紀頃、27は13世紀中頃のものである。28は木製の柄である。先端は三角形を呈し、抉ってくびれ部をもたせている。29は刷毛桶で、外面は焼けて炭化している。弥生終末期から古墳時代前期にかけて盛行したものである。

## (6) 調査の結果 (第5図)

第1遺構面では古代・中世、第2遺構面では弥生終末期～古墳前期・縄文の遺構が検出された。ただし県道と鞍骨川に挟まれた部分は河川改修による攪乱を受けているため遺跡の範囲から除外する。遺跡の名称は付近の字名から懇願浦之前遺跡とした。本調査対象面積は9,900m<sup>2</sup>で、2面あるため延べ面積は19,800m<sup>2</sup>である。

(越前憲子)



第6図 NEJ-16出土遺物 (1:4)、(1:8 (29)) T2 (25・26) T4 (1~13・16~19・21・23・28・29)  
T6 (20・27) T8 (24) T10 (14・15・22)

### 3 NE J-17埋蔵文化財包蔵地

#### (1) 調査対象地 (図版1・2)

NE J-17は、十三谷と呼ばれる仏生寺川流域の谷平野に位置する。南北を宝達丘陵から派出する小丘陵に挟まれ、ほぼ中央を仏生寺川支流の矢田部川が東西に流れる。現況は、北側丘陵裾が宅地、その他は田地・畑地である。標高は約5~6mで、矢田部川に向かってわずかに下っている。

#### (2) 調査の方法 (第8・9図)

幅約1.8m・長さ約10~50mのトレンチを14箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は14,890m<sup>2</sup>、調査面積は639m<sup>2</sup>である。

#### (3) 基本層序

I a層	現耕作土	にぶい黄色シルト質ロームなど (約30cm)
I b層	盛土	灰色砂質ロームなど (約30cm)
I c層	旧河川埋土	暗オリーブ灰色粘土質ロームなど (約35cm)
II 層	遺物包含層	灰色粘土質シルトなど (約45cm)
III 層		ピート混灰色粘土 (約30cm)
IV 層		黄灰色粘土

※ 下層確認のため一部で深掘りを行い、現況面より約2~3m掘削してみたところ、IV層の下に貝層（V層）、泥岩層（VI層）を確認した。（IV 自然科学分析 貝類の同定参照）

#### (4) 調査の状況 (第4表、第8・9図、図版9)

調査範囲南半に設定したT 2~4・11~14で、遺物を少量検出したものの、遺構は全く確認されなかった。また、遺物の大半は表土・盛土（I a・b層）からの出土であり、T11 III層で検出された縄文土器片を例外として、III層以下は無遺物層である。T 1・2・11~14では、矢田部川改修に伴う河川埋土（I c層）が検出されている。

#### (5) 出土遺物 (第7図、図版9)

縄文土器、土師器、須恵器、瀬戸美濃、青磁、中世土師器・珠洲・越中瀬戸などが出土した。

- 1・2は非口クロ成形の中世土師器。3は土師器の有段口縁臺、古墳時代前期白江式に比定される。
- 4は縄文時代後期、前田式に比定される深鉢と思われる。

#### (6) 調査の結果 (第8・9図)

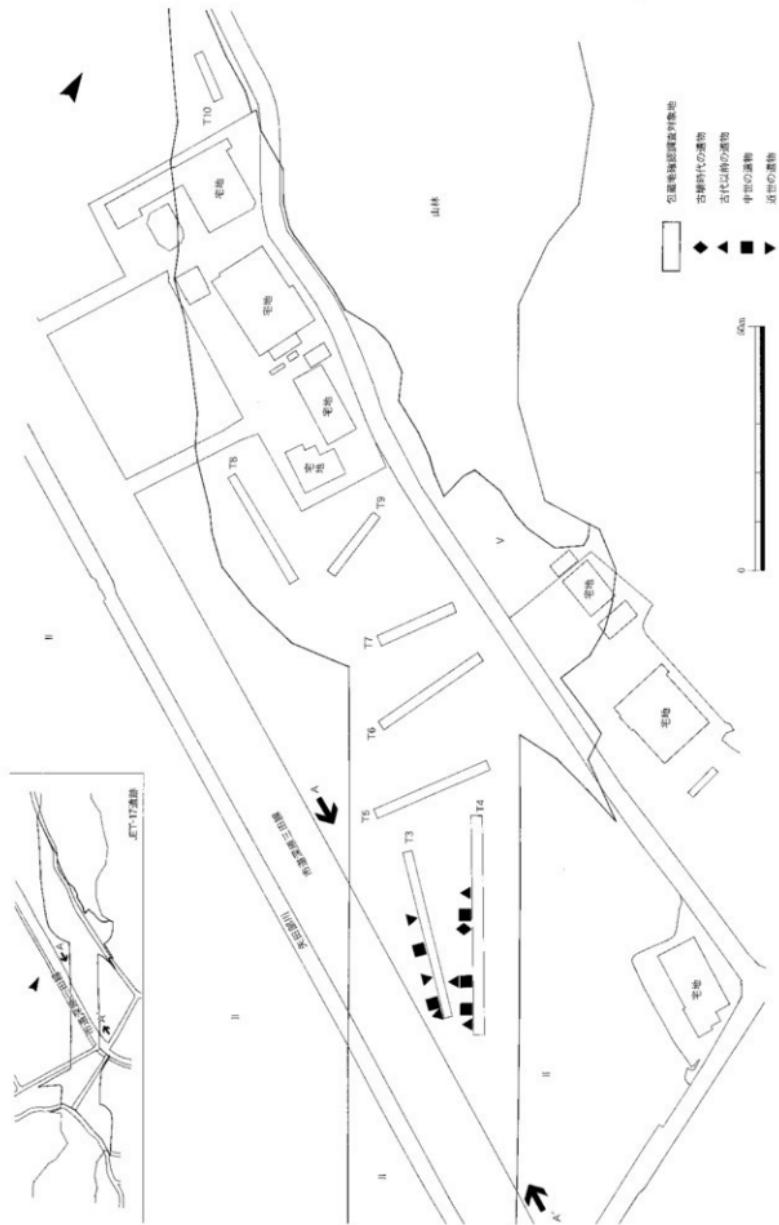
NE J-17埋蔵文化財包蔵地は、弥生時代から近世にかけての散布地として登録されているが、今回の調査範囲で遺跡を確認することはできなかった。



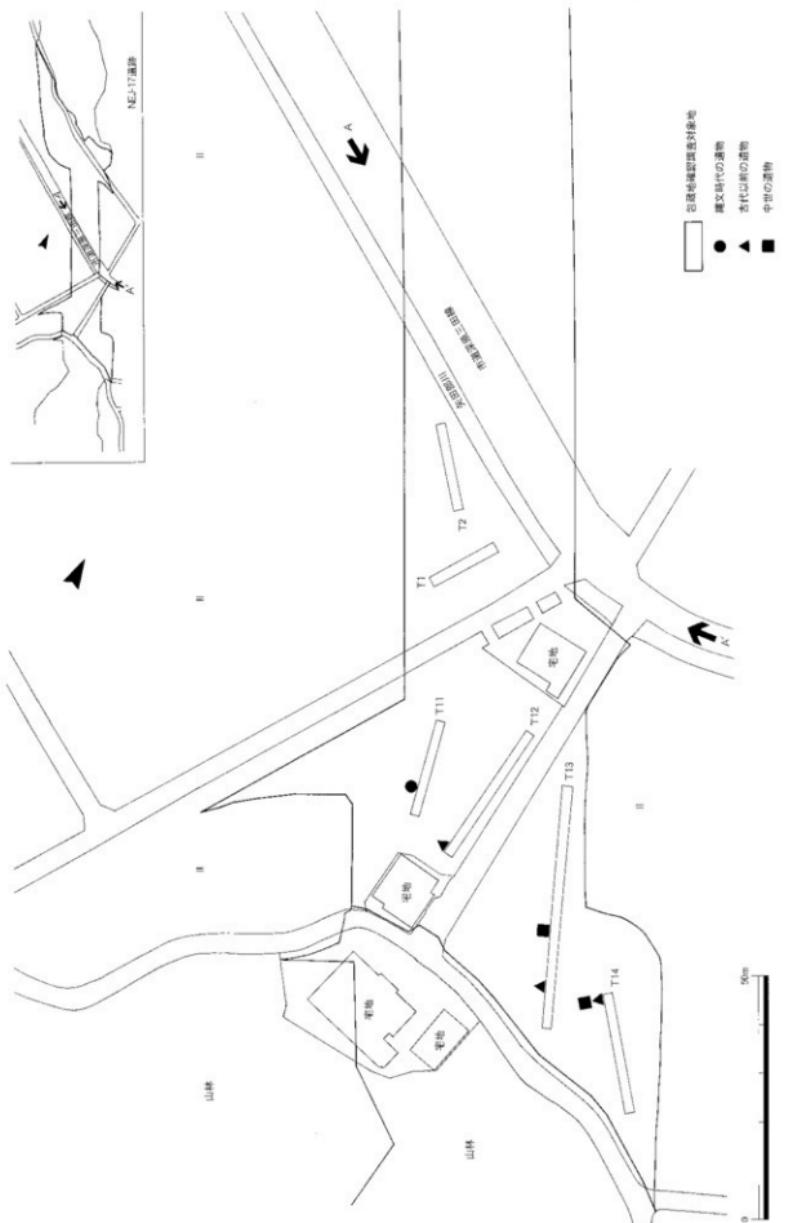
第7図 NE J-17出土遺物 (1:4)

トレンチ番号	全長(m)	発掘深度(m)	I a層	I b層	I c層	II層	III層	IV層	遺構
T 1	15	0.5							
T 2	18	0.6							
T 3	35	1.0	土師	中土・鉢形・伊万・白磁 土鉢・須恵・瓶・吉縫	—	—			
T 4	49	0.5			土師・土鉢	—	—		
T 5	25	0.4			—				
T 6	29	0.4			—	—	—	—	
T 7	17	0.4			—				
T 8	15	1.2			—				
T 9	25	0.9			—				
T 10	10	0.7			—	—	—	—	
T 11	20	1.5							
T 12	30	1.4	中土						
T 13	50	1.1	須恵・詰蓋						
T 14	25	0.9	土師・珠洲						

第4表 NE J-17トレンチ一覧



第8図 NEJ-17遺跡トレンチ位置図(1) (1:1,000)



第9図 NEJ-17遺跡トレンチ位置図(2) (1:1,000)

## 4 N E J-18埋蔵文化財包蔵地

### (1) 調査対象地（図版1・2）

N E J-18は、仏生寺川の支流である万尾川右岸、宝達丘陵から派出した小丘陵斜面と、それに挟まれた谷間に立地する。地形は谷奥から東方向の万尾川へ下っており、標高約12~14mを測る。丘陵部は一段高く、比高差約3m、標高約18~21m。現況は山林・田地である。

### (2) 調査の方法（第10図）

幅約1.65m・長さ約45~50mのトレンチを5箇所、幅約1.0m・長さ約6~30mのトレンチを4箇所、計9箇所設定し、重機及び人力により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は4,910m<sup>2</sup>、調査面積は477m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序

#### 谷部

I a層	現耕作土	にぶい黄褐色砂質シルト（約40cm）
I b層	盛土	暗オリーブ灰色砂質シルト（約15~150cm）
II 層	谷埋土	オリーブ黒色砂質シルトなど（約30~150cm）
III 層	地山	オリーブ灰色砂

#### 丘陵部

I a層	表土	黒褐色砂質ローム（約25cm）
I b層	盛土	灰黒褐色砂質ローム（約10~75cm）
II 層	地山	暗褐色粘土質シルト

### (4) 調査の状況（第5表、第10図、図版9）

谷部に設定したT 1~5では、谷埋土が厚く堆積しており、地山（III層）は部分的な深掘りによって確認したにすぎない。遺物は、縄文土器、土師器・須恵器、中世土師器・珠洲、越中瀬戸が少量出土しているが、遺構は検出されていない。丘陵部（T 6~9）からは、遺物はほとんど検出されず、遺構も確認されなかった。T 6南端部の盛土（I b層）中より、須恵器、珠洲、唐津・伊万里などが出土しているが、斜面端部は崩落した際に盛り土されており、遺跡に伴うものは判然としない。なお、調査範囲東端の丘陵斜面に横穴状の掘り込みがみられたため、トレンチ（T 9）を設定し、前庭部の有無の確認などを行ったが、関連遺構および遺物は検出されなかった。

### (5) 出土遺物（図版9）

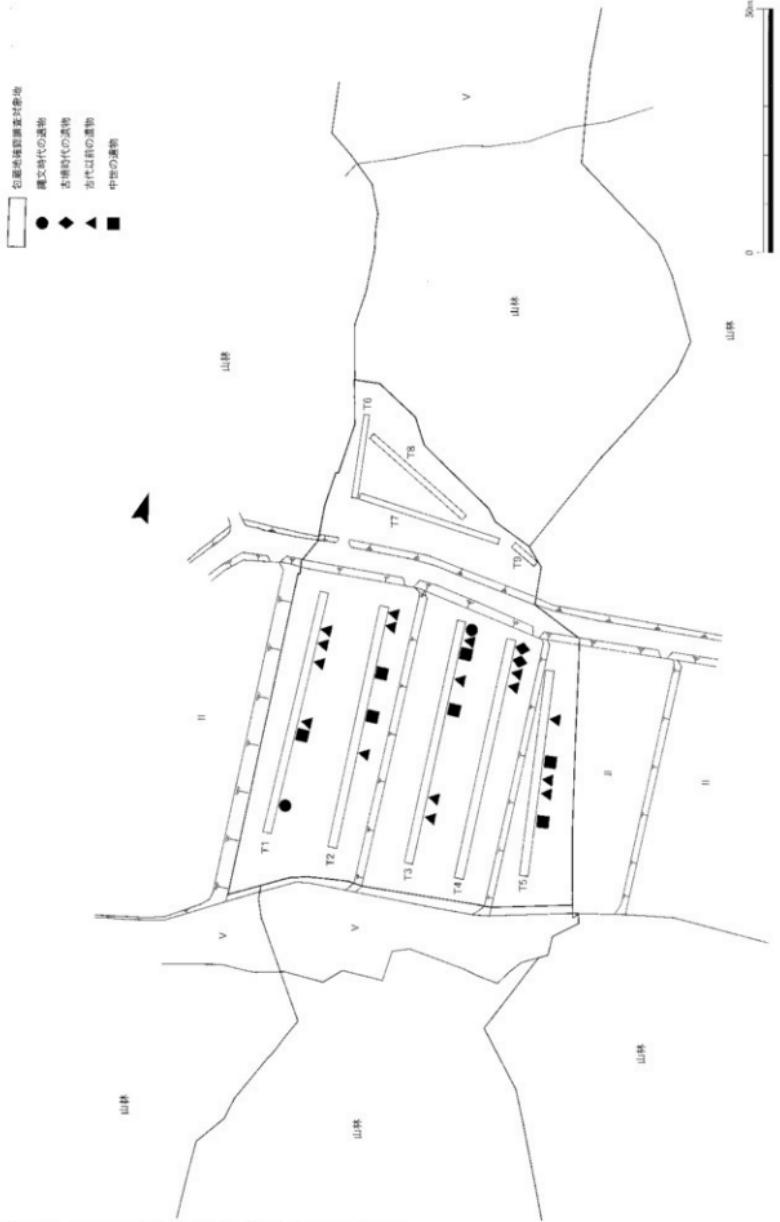
同化していないが、縄文土器、土師器・須恵器、中世土師器・珠洲、越中瀬戸・唐津・伊万里などが出土している。

### (6) 調査の結果（第10図）

N E J-18埋蔵文化財包蔵地は、平成11年度の分布調査で珠洲が採集され、中世の散布地として登録されているが、今回調査を行った範囲では遺跡は確認されていない。

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	I a層	I b層	II層	III層	遺構
T 1	50	1.2		土師・珠洲	土師		
T 2	50	1.3	唐津	土師・須恵・珠洲	土師		
T 3	50	1.3		縄土・土師・須恵・中土・珠洲	土師・珠洲		
T 4	50	1.3		土師			
T 5	45	1.2	土師	須恵・中土・珠洲			
T 6	17	0.5		珠洲・唐津・伊万里	須恵	-	
T 7	30	0.7			-	-	
T 8	25	0.3			-	-	
T 9	6	0.3			-	-	

第5表 NEJ-18トレンチ一覧



第10図 NE J-18遺跡トレーンチ位置図 (1 : 1,000)

## 5 正保寺遺跡

### (1) 調査対象地 (図版1・2)

正保寺遺跡は、仏生寺川の中流右岸、仏生寺・神代丘陵から十三谷に向かって延びる小丘陵上から裾部にかけて立地し、尾根続きに約300m北東には、中世城館として知られる飯久保城跡が位置する。現況は山林・畑地・田地などで、標高は約9~51mと比高差約42mを測る。本遺跡は中世寺院跡と伝えられ、平成7年度に氷見市教育委員会が行った分布調査では、丘陵西斜面に石造物が散在しているのが確認されている。

### (2) 調査の方法 (第11・12図)

幅約1.0m・長さ約3~25mのトレンチを19箇所、1辺約2.0mのグリッドを3箇所設定し、人力により掘削、遺構及び土層断面の検出を行った。なお、丘陵裾に設定したトレンチのうち、T13・14・16・17・19は湧水が激しく、遺構の検出や土層断面の観察などは困難と判断し、欠番とした。調査対象面積は16,950m<sup>2</sup>、調査面積は228m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序

丘陵斜面

I 层	表土・盛土	褐灰色ロームなど
II 层	古代・中世遺物包含層	褐灰色粘土質ロームなど
III 层	古代遺物包含層	灰黄褐色粘土質ロームなど
IV a 层	古代遺構面	にぶい黄褐色シルト質ローム
IV b 层	地山	明黄褐色泥岩層

丘陵裾

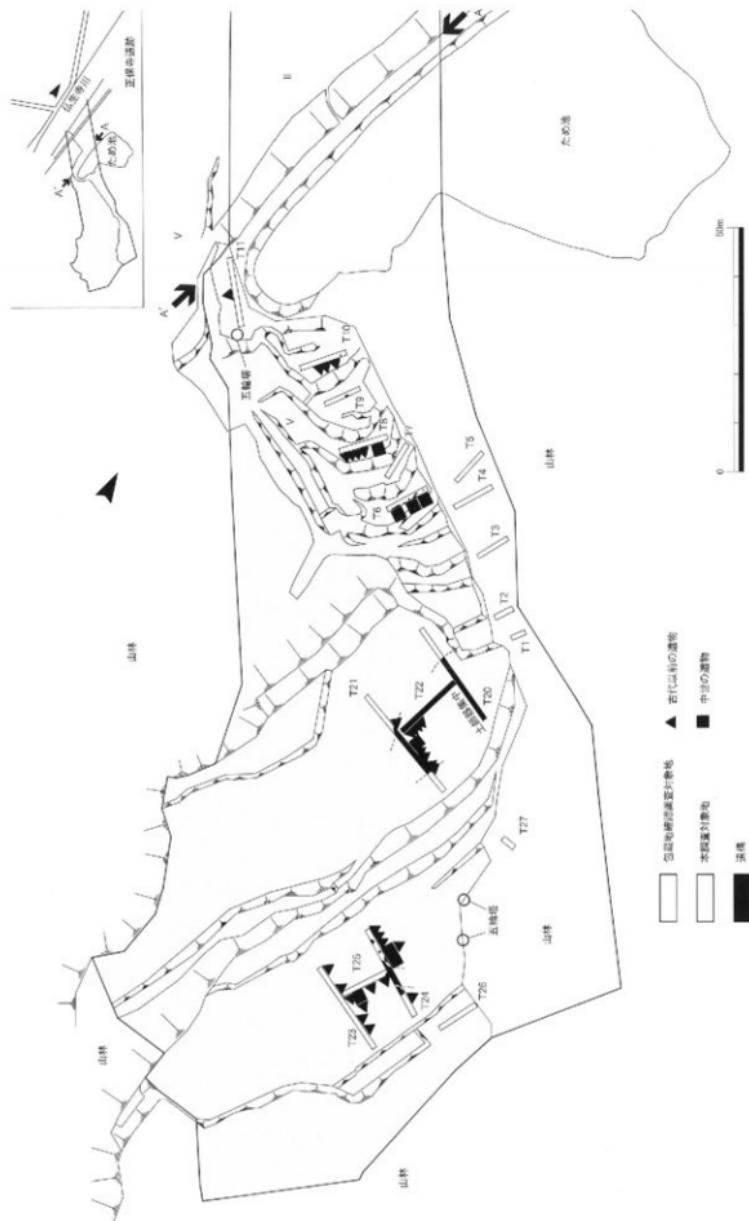
I a 层	現耕作土	にぶい黄褐色粘土質シルトなど
I b 层	盛土	黒褐色粘土質シルトなど
II 层	遺物包含層	オリーブ黒色粘土質シルトなど
III 层	中世遺構面	灰色粘土

### (4) 調査の状況 (第6表、第11・12図、図版10)

丘陵斜面に設定したT2~4・6~11・20~27で、古代～中世遺物包含層であるII層を検出し、そのうちT8~10・20~25では、古代遺物包含層(III層)を確認した。遺構は、T6・9・10・20

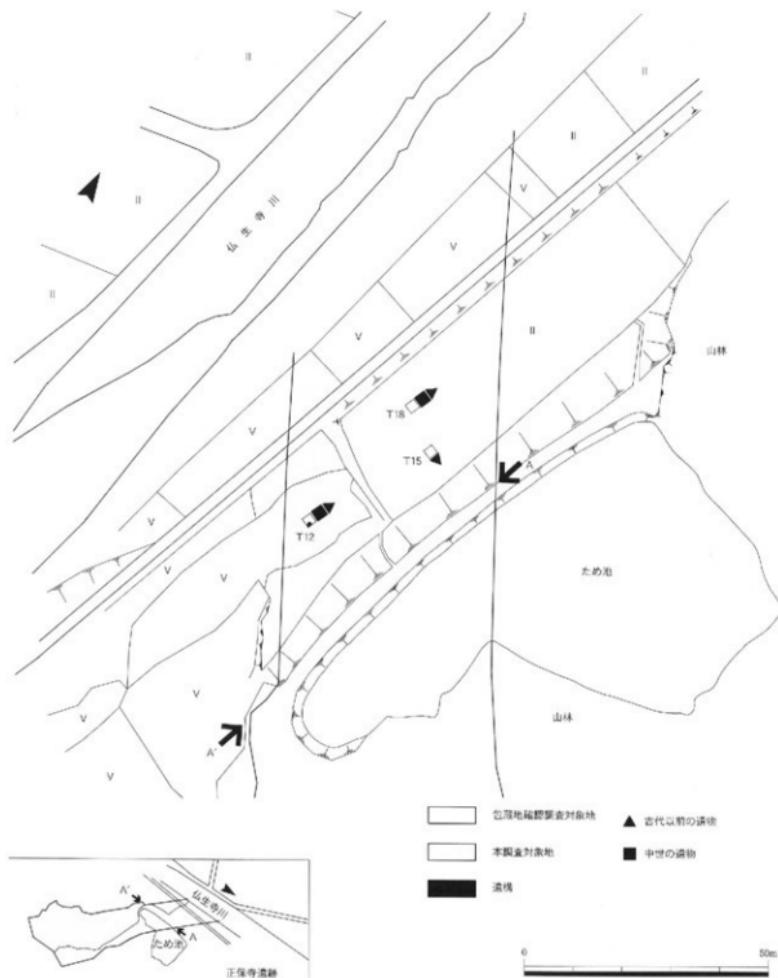
トレンチ番号	全長(m)	遺構面深度(m)	I層	II層	III層	IV a層	IV b層	遺構
T 1	3	0.1		—	—	—	—	
T 2	4	0.2		—	—	—	—	
T 3	7	0.2~0.7		—	—	—	—	
T 4	9	0.4		—	—	—	—	
T 5	8	0.2		—	—	—	—	
T 6	9	0.7(Va層)	株洲	株洲		—	—	土坑3・穴3
T 7	8	0.3~1.4(Va層)			—	—	—	
T 8	10	1.3(Va層)		土師				
T 9	8	1.8(Va層)						土師1
T 10	10	0.8~1.8(Va層)	土師	土師		—	—	穴1
T 11	14	0.1	盛土		—	—	—	
T 12	2	0.6	土師・株洲	株洲・石製品		—	—	土坑
T 15	2	1.0	土師		—	—	—	
T 18	2	1.3	断面	土師・株洲		—	—	
T 20	23	0.4(Va層)		土師・須恵・侏羅・鉄滓	土師			大溝1
T 21	25	0.3(Va層)	土師	須士・土師・伊方・埴器				大溝1
T 22	15	0.8(Va層)	土師	土師・中土・灰陶	土師			大溝1
T 23	20	0.4~1.2(Va層)	土師		土師	土師		
T 24	20	0.1~1.0(Va層)	土師・中土・侏羅・五輪塔	土師	土師			溝1・土坑3・穴1
T 25	11	1.3(Va層)	土師・漏戸	土師				土坑1
T 26	9	0.2(Va層)			—	—	—	穴1
T 27	3	0.5~1.4			—	—	—	

第6表 正保寺遺跡トレンチ一覧



第11図 正保寺遺跡トレンチ位置図（1）（1：1,000）

～22・24～26のIVa層上面から、溝・土坑・穴を検出している。遺物は、土師器・須恵器、中世土師器・珠淵などが出土しているが、大半は標高約41mと50mにあるテラス状平坦面（T20～23、T24～26）からの出土で、特に下位平坦面で検出された大溝の丘陵頂部側に集中している。大溝は幅約10～15m、深さ約1.6mを測り、時期は出土遺物から9～10世紀代に帰属するものと想定される。上位平坦面では、溝・土坑・穴を検出した。遺構の時期は、下位平坦面の大溝とほぼ同時期に比定されるだろう。また、調査範囲南東端部に1辺約6mほどの方形の盛り上がりがみられたため、トレーナー（T26）を設定したところ、柱穴と思われるピット1基が検出された。遺物を伴わないと時期は



第12図 正保寺遺跡トレーナー位置図(2) (1:1,000)

不明だが、建物の基壇と推定される。このほか上位平坦面の東端部2箇所および丘陵裾の計3箇所で、五輪塔がまとめられ放置されているのを確認した。調査対象地北東半部（T 1～5・27）からは、遺構および遺物は検出されていない。

丘陵裾に設定したグリッド3箇所のうち、南端に位置するT12では、Ⅲ層上面で土坑が検出され、覆土中からは珠洲擂鉢と石製品（砥石？）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から判断して15世紀代と思われる。一方、北半部に設定したT15・18は、T12に比べ一段低く、湧水が著しいため遺構面を確認することができず、遺物も土師器や珠洲を数点検出するに止まった。

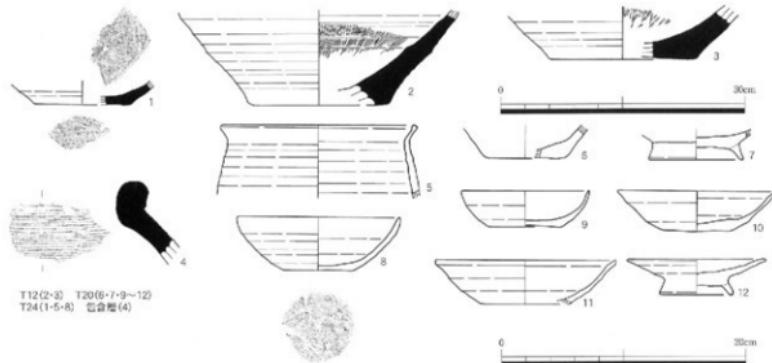
#### (5) 出土遺物（第13図、図版10）

土師器・須恵器、中世土師器・珠洲・瀬戸美濃、伊万里、五輪塔（空風輪）などが出土している。1～4は珠洲。1～3は擂鉢で、1は8条1単位の直線鉗目が施される。2・3はともに内面の摩滅が著しいが、鉗目を放射状に隙なく巡らす。4は叩鉢の口縁部破片。1は吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期、2・3はⅤ～Ⅵ期、4はⅣ期に比定できるだろう。5～12は土師器。5は壺の口縁部・胴上部破片。口縁を内側に折り曲げ、内外面ともロクロナデが施される。6は壺の底部破片。7は有台壺の底部破片。8～11は無高台の壺。8・9の体部は内湾し、8の底部には回転糸切痕が残る。10・11は口縁部が外反する。12は有台壺。帰属時期は概ね9世紀後半～10世紀の所産と思われる。

#### (6) 調査の結果（第11・12図）

今回の調査では、調査対象地の南西半部（T 6～12・20～26）において遺跡の広がりを確認した。遺跡の時期は古代～中世で、丘陵斜面（T 6～11・20～26）では、2箇所の平坦面を中心に古代遺跡の広がりが確認された。当初、伝承される中世社寺や、尾根縁に近接する飯久保城跡との関連から中世遺跡の存在が想定されていたが、丘陵上で確認することはできなかった。また、上位平坦面で基壇状の盛り土を確認したが、伝承される中世社寺との関連は明らかではない。一方、丘陵裾（T12）では、中世の遺構面を検出した。今回の調査対象地外であるが、仏生寺川に沿ってT12の南側に遺跡範囲が広がる可能性は高い。

調査対象地の北東半部（T 1～5・15・18・27）からは遺構は確認されず、遺物もほとんど検出されないため、遺構範囲からは除外する。以上の結果から、本調査対象面積は丘陵斜面（古代）、丘陵裾（中世）とともに単層で、約8,600m<sup>2</sup>である。



第13図 正保寺遺跡出土遺物（1：4（4～12）、1：6（1～3））

## 6 粟原A遺跡

### (1) 調査対象地 (図版3)

粟原A遺跡は、仏生寺川支流である万尾川上流の左岸、宝達丘陵から派出した小丘陵の斜面から裾部にかけて立地する。標高は約4~21mを測り、現況は畠地・山林である。約250m上流の丘陵裾には、遺物散布地（時期不明）の粟原B遺跡が位置する。本遺跡は、平成7年度の水見市教育委員会が行った分布調査において古墳時代後期から古代の遺物を探集し、古代（奈良時代）の散布地として登録されている。

### (2) 調査の方法 (第15図)

幅約1.0m・長さ約13~25mのトレンチを4箇所設定し、人力によって掘削、遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は3,100m<sup>2</sup>、調査面積は76m<sup>3</sup>である。

### (3) 基本層序

丘陵部

I 层	表土黒	褐色シルト質ロームなど（約20cm）
II 層	古代遺構面	にぶい黄褐色粘土質ローム

裾部

I a 层	現耕作土	暗灰黄色砂質ローム（約20cm）
I b 層	盛土	黄灰色粘土質ロームなど（約30cm）
II 層	古代遺物包含層	黄灰色粘土質ローム（約15cm）
III 層	古代遺構面	オリーブ灰色粘土など

※ 下層確認のため一部で深掘りを行い、現況面より約1m掘削してみたが、遺物包含層及び遺構面を確認することはできなかった。

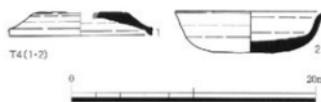
### (4) 調査の状況 (第7表、第15図、図版11)

遺物包含層を確認できたのは丘陵裾に設定したT4のみで、古代遺物包含層であるII層から土師器や須恵器が少量ではあるが出土している。T4では、III層上面において溝3条・土坑2基を検出している。このうち東端に位置する土坑からは須恵器壺が伏せた状態で、また土坑の西脇にあたる遺構検出面（III層）直上からは須恵器壺蓋が出土している。遺構の時期は検出された須恵器から判断して、8~9世紀代に帰属するものと思われる。一方、丘陵斜面（T1~3）ではII層上面で溝・土坑を検出したが、現地表面から遺構検出面（II層）までは約20cmと浅く、遺物包含層および遺物は確認されていない。そのため、遺構の帰属時期は明らかではないが、分布調査の結果などを踏まえて、丘陵裾とほぼ同時期に比定されるものとしておきたい。

### (5) 出土遺物 (第14図、図版11)

土師器・須恵器、越中瀬戸が出土している。

1・2ともに須恵器。1はロクロ成形の壺蓋。頂部付



近を欠損するが、つまみを有するものと思われる。口縁 第14図 粟原A遺跡出土遺物 (1:4)

トレンチ番号	全長(m)	遺構面深度(m)	I a 層	I b 層	II 層	III 層	遺構
T 1	20	0.3(I層)		-		-	土坑2
T 2	18	0.2(II層)		-		-	溝2・土坑2・穴3
T 3	13	0.2(II層)		-		-	土坑1
T 4	25	0.6(III層)	土師	遺構	土師・須恵		溝3・土坑2

第7表 粟原A遺跡トレンチ一覧

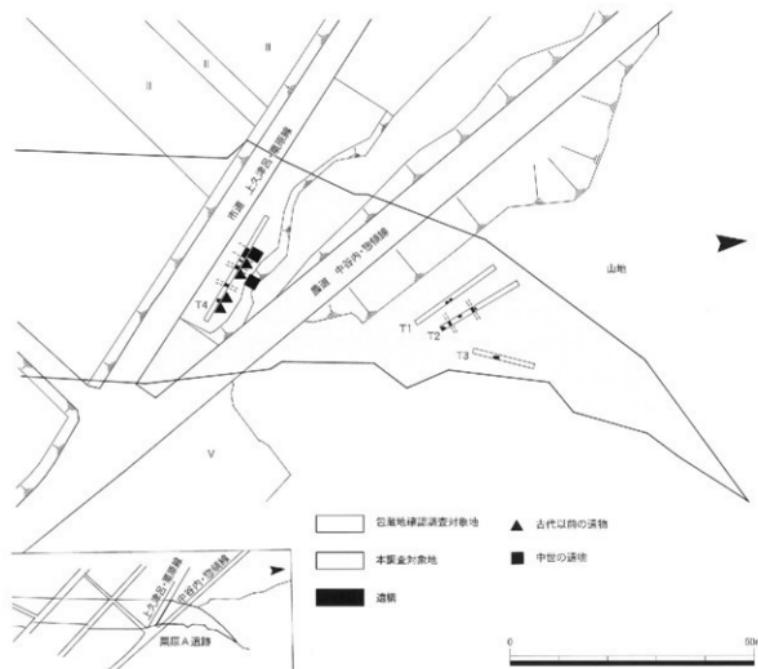
端部は外反する。2は無高台の坏身。底部は回転ヘラキリ、口縁端部がやや外反する。内外面ともロクロナデを施す。8～9世紀代の所産と思われる。

#### (6) 調査の結果 (第15図)

今回の調査では、丘陵裾 (T 4)において遺跡の広がりを確認した。遺跡の時期は古代で、8～9世紀代を中心とすると思われる。丘陵斜面 (T 1～3) では遺物が検出されていないため詳細時期は断定できないが、遺跡範囲は丘陵斜面を含め調査対象地全面に広がるものと想定される。以上のことから、調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、丘陵南西斜面から裾にかけて3,100m<sup>2</sup>となる。

なお、今回は調査対象地であるが、市道上久津呂・栗原線を挟んで南側に広がる谷平野部へ遺跡範囲が拡がる可能性はあり、今後調査による確認が必要と考える。また、約250m北西に位置する栗原B遺跡は、時期不明ではあるが立地的にも距離的にも本遺跡と関連する可能性は十分考えられる。今後の調査で両遺跡の関係が明らかになることを期待したい。

(長瀬 出)



第15図 栗原A遺跡トレンチ位置図 (1 : 1,000)

## 7 中谷内遺跡

### (1) 調査対象地 (図版3)

佐生寺川の支流である中谷内川に開析された谷底平野に位置し、南側と北側には石動丘陵から派出した小丘陵がのびている。遺跡は平野部を中心に、丘陵上へも広がりが認められる。現況は、平野部は水田、丘陵部は山林で、丘陵裾部は畠地、荒蕪地となっている。北側丘陵部の標高は、最も高いT36で約22.2m、丘陵裾のT7で約5.2mを測る。南側丘陵部は最も高いT32で約8.7m、丘陵裾のT28で約5.4mを測る。平野部は東へ向かって低くなっている。T8が最も高い段にあって約5.0m、3面重層のT9～15では約4.2m、古墳～中世の2面重層のT18～20では約4.1m、第2面に繩文を検出したT25を含むT16・17・22～27が最も低い段で約3.0～3.4mとなっている。

### (2) 調査の方法 (第16～18図)

幅約1.65m・長さ10～50mのトレンチ19箇所と、幅0.9m、長さ15～55mのトレンチ10箇所は重機による掘削を行い、幅1m、長さ15～25mのトレンチ3箇所は人力による掘削を行った。調査対象面積は42,870m<sup>2</sup>、調査面積は1,455m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序と調査の状況 (第8表、第16～18図、図版12・13)

#### ① 北側丘陵裾部分 (T1～7・T33～40)

##### a. 基本層序

I a層	表土	暗褐色シルト質ローム・灰黃褐色シルト質ローム
I b層	盛土	暗灰黄色シルト
II 層	中世包含層	黒褐色シルト・にぶい黄褐色粘土
III 層	中世遺構検出面	浅黄色粘土質ローム・にぶい黄橙色泥岩層
IV 層	古代以前包含層?	灰色粘土質ローム・オリーブ黒色シルト
V 層	地山	明黄褐色粘土質ローム
	地山	オリーブ黒色粘土質ローム層
	地山	綠灰色砂質ローム層

##### b. 調査の状況

丘陵部 (T33～40) では、I層の平均層厚は約20cm、II層は110cmを測るT37を除けば約20～40cm、地表面から地山(III層)までの深さは、T37が150cmを測るほかは平均約50cmである。遺構はII層上面で柱穴・溝・土坑を検出した。遺物は最も丘陵裾にあるT40を中心に、土師器(古代)、中世土師器・珠渦が出土した。

丘陵裾部 (T1～7) では、I層は谷状に深くなっている部分もあり、層厚の平均は約40cmである。T1・2・7ではI層直下が遺構面になっているが、その他のトレンチではII層が谷状に深くなっている部分もあり、II層の平均層厚は約20cmである。III層上面では柱穴・溝・土坑を検出した。IV層からは土師器が1点のみ出土しているが、遺構は確認されていない。

#### ② 平野部 (T8～27)

##### a. 基本層序

I a層	表土	黄灰色粘土質シルト
I b層	盛土	黄灰色粘土質シルト
II 層	古代・中世包含層	黒褐色粘土質シルト
III 層	古代・中世遺構面・古墳・古代包含層	オリーブ灰色粘土質シルト
IV 層	古墳・古代遺構面・古墳包含層	黄灰色粘土質シルト
V 層	古墳遺構面・繩文包含層	オリーブ灰色粘土質シルト
VI 層	繩文遺構面	オリーブ黒色粘土質シルト

## b. 調査の状況

遺構は、Ⅲ層・Ⅳ層上面で柱穴・溝・土坑、V層上面で柱穴、VI層上面で柱穴・溝が検出された。ただし、Ⅳ～VI層は遺跡全体に広がっているのではなく、T22～25ではⅢ層（中世・古代面）の下はIV・V層が無く、VI層（縄文面）となっている。T18ではⅢ・IV層を確認した。T12～14ではⅢ・IV・V層を確認した。上層の遺構の保護のため、下層の状態を確認できなかったトレンチもあるが、平野部には概ね2面または3面の遺構面が広がっていると考えられる。

③南側丘陵裾部（T28～32）

### a. 基本層序

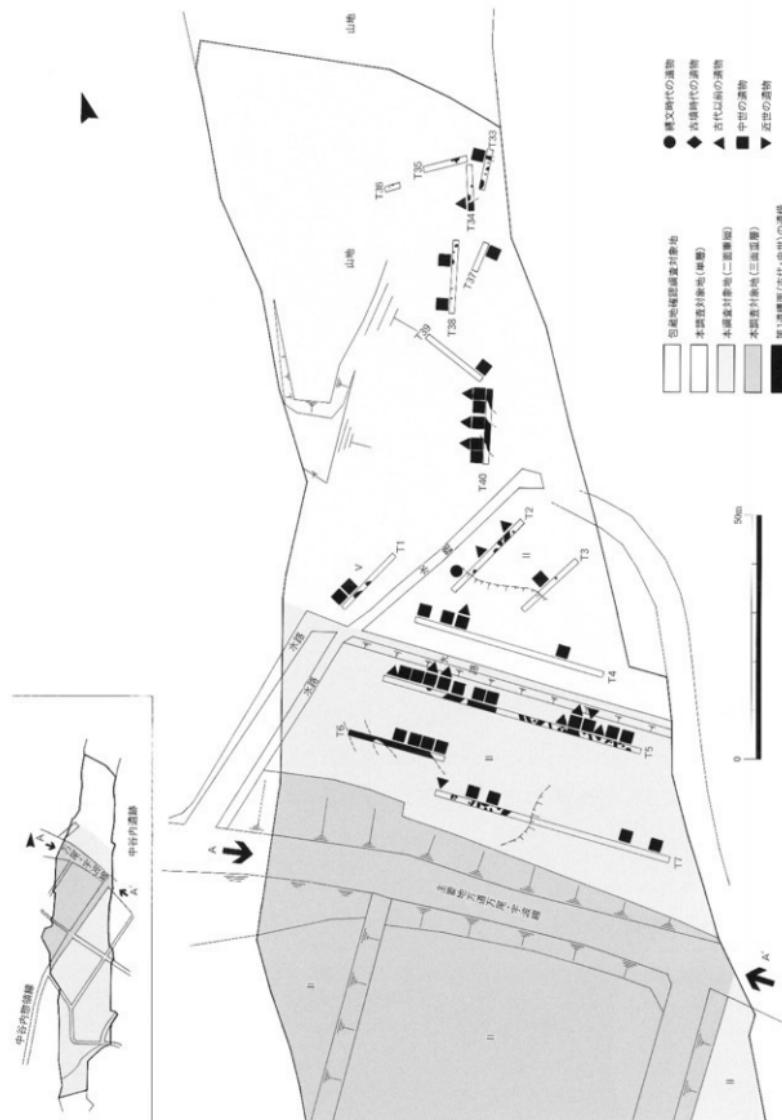
I層	表土	オリーブ褐色シルト質ローム
II層	中世包含層	緑灰色シルト
III層	中世遺構検出面・縄文包含層	にぶい黄色粘土質ローム
IV層	縄文検出面	緑灰色砂質シルト

## b. 調査の状況

I層の層厚はT29では約100cmあるが、その他のトレンチでは平均約40cmである。II層はT29ではないが、その他のトレンチでは平均約15cmである。IV層まで確認したのはT30で、III層の平均層厚は約40cmである。中世の遺構は柱穴・溝・土坑で、中央には南北方向の谷がある。縄文の遺構は、一部分しか深掘りしていないため、平面形は不明である。

トレンチ番号	全長(m)	遺構面深度(m)	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	遺構
T 1	15	0.3(V層)	—	—	—	—	—	—	穴2(土師)・溝1
T 2	20	0.4(V層)	須賀・埴生?	—	—	—	—	—	穴5(土師)・溝3(土師)・谷
T 3	15	0.3(V層)	土師	—	—	—	—	—	渠1・谷
T 4	40	1.7(V層)	埴生・土師	—	—	—	—	—	谷
T 5	55	0.3(V層)	土師・埴生	須賀・砾石	—	—	—	—	穴17(須生・中土)・溝9(須山・土師・砾石)
T 6	20	0.5(V層)	土師・埴生	土師・砾石	—	—	—	—	渠2
T 7	50	0.2(V層)	土師・埴生	—	土師	—	—	—	穴6(土師・砾石)・渠4・谷(土師)
T 8	20	1.1(V層)	土師	—	—	—	—	—	穴1
T 9	20	0.3(V層)	—	—	—	—	—	—	穴2
T10	20	1.5(V層)	須賀・中土・伊万里・須生	土師	—	—	—	—	穴20・渠1
T11	20	1.3(V層)	土師・埴生	須生?・須生・土師	—	—	—	—	穴1・渠1
T12	50	1.7(V層)	須生・土師・砾石	土師	—	—	—	—	穴11
T13	50	1.6(V層)	1耕・中土	埴生・土師・中土	土師	—	—	—	穴6・渠1
T14	35	1.1(V層)	埴生・須生	埴生・須生・土師	須生・土師	—	—	—	穴10・渠3(土師)
T15	30	0.4(V層)	須生・土師・砾石・青磁	埴生・須生	須生	—	—	—	穴9・渠2(須生・土師)
T16	20	0.7(V層)	埴生・土师	埴生	—	—	—	—	渠2
T17	30	0.5(V層)	須生・土师・須生・須生・須生	—	—	—	—	—	穴12(須生・土師)
T18	50	1.4(V層)	土師	須生・須生・土师	須生・須生・土师	埴生	—	—	穴7(土師)・渠1(須生)
T19	50	?	埴生・土师	須生・土师・砾石	—	—	—	—	—
T20	45	0.4(V層)	須生・土师・砾石・埴生	土师・須生・内風	—	—	—	—	穴14(土师)・谷(埴生・土师)
T21	30	0.7(V層)	埴生・土师	埴生・土师	埴生・土师	—	—	—	穴24(土师・須生・中土・砾石)
T22	15	1.0(V層)	埴生・土师	砾石	土师	—	—	—	穴1・渠1
T23	15	1.0(V層)	中土・須生	須生・土师	—	—	—	—	穴4
T24	50	1.8(V層)	須生・土师・須生・中土・砾石	土师	—	—	—	—	穴4・渠2
T25	50	1.0(V層)	埴生・土师・須生・中土・砾石・青磁	土师	須生・須生	—	—	—	穴20・渠2
T26	40	0.4(V層)	土师・須生・埴生・青磁	—	須生・土师・須生	—	—	—	穴2
T27	35	0.6(V層)	土师・中土・砾石	—	—	—	—	—	—
T28	10	0.6(V層)	—	—	—	—	—	—	穴3
T29	15	1.0(V層)	中土・砾石	—	—	—	—	—	—
T30	25	0.8(V層)	土师・砾石・伊万里・須生	土师	須生	—	—	—	穴17(須生)・渠1(中土)
T31	25	0.5(V層)	須生	—	須生	—	—	—	谷(須生・土师・砾石・伊万里)・穴2
T32	15	0.3(V層)	—	須生	—	—	—	—	渠1(須生)・穴1(中土)

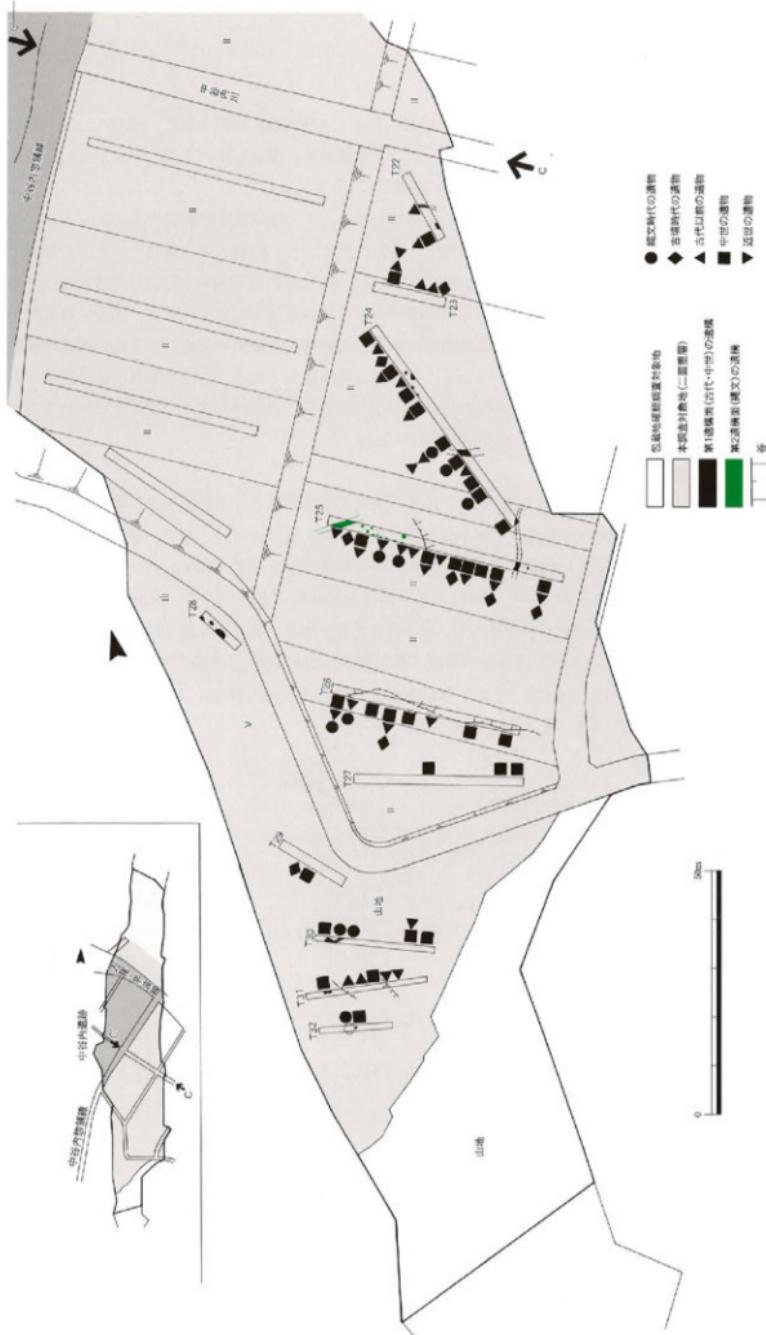
第8表 中谷内遺跡トレンチ一覧



第16図 中谷内遺跡トレンチ位置図(1) (1 : 1,000)



第17図 中谷内遺跡トレンチ位置図（2）（1：1,000）



第18図 中谷内遺跡トレンチ位置図 (3) (1 : 1,000)

#### (4) 出土遺物 (第19図、図版14)

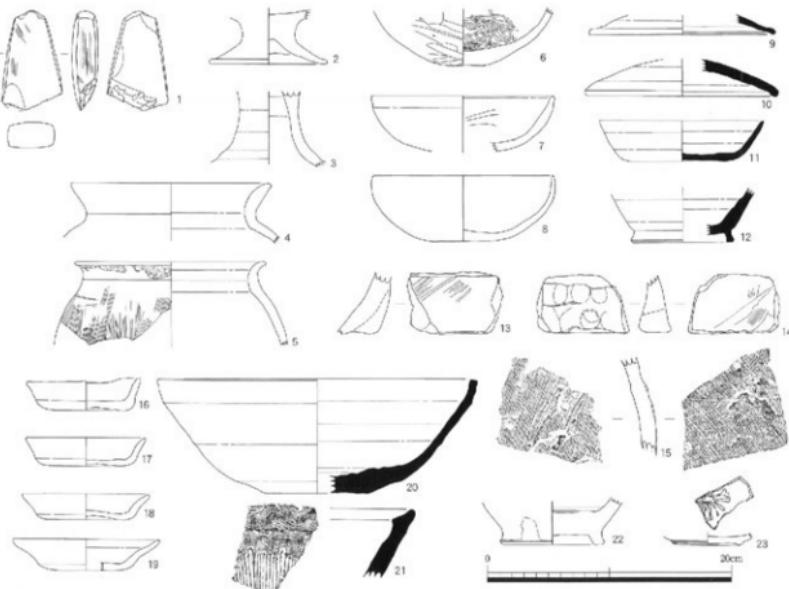
遺物は、縄文土器、土師器（古墳時代）、土師器（古代）・須恵器、中世土師器・珠洲・白磁・瀬戸美濃・信楽、越中瀬戸・伊万里・唐津、漆器、砥石・磨製石斧が出土した。なお、平成7年度に水見市教育委員会が行った分布調査では土製羽口・鉄滓も出土している。

1は磨製石斧である。2～8は古墳時代の土師器である。2・3は高坏の脚部である。4・5は壺で「く」の字状口縁を呈する。6は壺の体部で、外面ヘラケズリ、内面ミガキを施す。7・8は椀である。7は内面にミガキを施す。9～12は須恵器である。9・10は壺蓋である。11は壺で底部はヘラキリである。12は壺の底部である。13～15は置き甕である。14は底部で外面にハケメ、内面には成形のための指頭圧痕が残る。16～19は中世土師器皿である。口縁部には横ナデを施し、底部外面は無調整である。13世紀～14世紀前半頃のものである。20・21は珠洲描鉢である。22是中国製白磁の底部である。削り出し高台で、内面及び外面の高台外側まで釉がかかる。23は瀬戸皿で、見込みに印花文を施し、底部外面には輪ドチ痕が残る。16世紀のものである。

#### (5) 調査の結果 (第16～18図)

北側の丘陵部（T1～4・33～40）では、中世の遺構面を検出した。平野部では、標高の高い北西部分（T8～15）に3面の遺構面の存在が推定される。第1遺構面は古代・中世、第2遺構面は古墳時代・古代、第3遺構面は古墳時代である。北側と中央部分（T5～7・16～21）には2面の遺構面の存在が推定される。第1面は古代・中世、第2面は古墳時代・古代である。標高の低い南東部分（T22～27）には2面の遺構面が推定される。第1面は古代・中世、第2面は縄文時代である。南側の丘陵裾部（T28～31）では、第1遺構面で中世、第2遺構面で縄文時代の遺構が検出された。

本調査対象面積は、42,870m<sup>2</sup>で、そのうち遺構面が1面の範囲は7,290m<sup>2</sup>、2面の範囲は23,270m<sup>2</sup>、3面の範囲は10,920m<sup>2</sup>であり、延べ面積は86,590m<sup>2</sup>である。  
(越前慎子)



第19図 中谷内跡出土遺物 (1 : 4) T5 (18) T12 (1) T13 (2・4) T18 (3・5・7・9・14・15・21)  
T19 (10) T20 (11・19) T21 (17) T23 (20) T24 (23) T25 (8) T26 (13・22) T29 (16) T40 (12)

## 8 中尾横穴墓群

### (1) 調査対象地（図版4）

中尾横穴墓群とされていた調査対象地は、南部山地（早借山地）に連なる荒館丘陵の一部で、中尾山の字名をもつ小丘陵の斜面である。現況は山林である。標高は、最も高いT6・7で約21~23m、最も低いT1で約11mを測る。

### (2) 調査の方法（第20図）

幅約1~2.6m・長さ約7~30mのトレンチを北側斜面に2段2箇所と西側斜面に3段7箇所設けて地山まで人力による掘削を行った。東側斜面は崩落していたため、トレンチは設定しなかった。調査対象面積は4,010m<sup>2</sup>、調査面積は252m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序

I 层	表土	黒褐色シルト質ローム
II 层	地山	にぶい・黄褐色ローム
III 层	地山	灰黄褐色泥岩

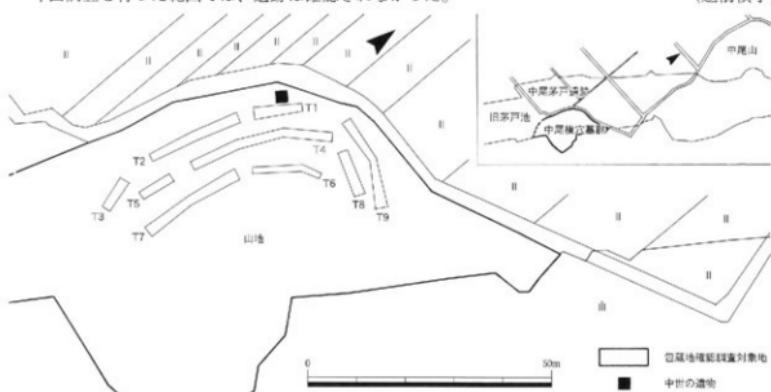
### (4) 調査の状況（第9表、第20図、図版15）

遺物は、最も低い位置に設けたT1で、珠洲の破片が3点出土したものの、遺構はいずれのトレンチからも検出されなかった。

### (5) 調査の結果（第20図）

今回調査を行った範囲では、遺跡は確認されなかった。

（越前慎子）



第20図 中尾横穴墓群トレンチ位置図（1:1,000）

トレンチ番号	全長(m)	堀削深度(m)	I層	II層	III層	遺構
T 1	10	1.7	珠洲			
T 2	20	1.4				
T 3	7	1.6				
T 4	30	1.5				
T 5	7	1.4				
T 6	14	0.9				
T 7	22	1.6				
T 8	10	1.8				
T 9	20	1.7				

第9表 中尾横穴墓群トレンチ一覧

## 9 中尾茅戸遺跡

### (1) 調査対象地（図版4）

中尾茅戸遺跡は、上庄川支流の紅谷川上流右岸、千久里山から南に延びる小丘陵や中尾山に挟まれた谷奥に立地する。今回の調査対象地は、丘陵裾に位置する茅戸池跡地にあたり、北側には、平成14年度に実施された発掘調査で、古墳時代の集落跡が確認された中尾茅戸遺跡A地区が隣接することから、遺跡範囲の拡がる可能性が想定されていた。現況は荒蕪地である。標高は現況で約11m、北側の谷平野からは一段高くなっており、比高差は約4mを測る。

### (2) 調査の方法（第21図）

幅約1.8m・長さ約50~60mのトレンチを2箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は6,500m<sup>2</sup>、調査面積は180m<sup>2</sup>である。

### (3) 基本層序

I 层	旧茅戸池埋土	廃土（約165~350cm）
II a 層		灰色粘土など（約35~55cm）
II b 層		オリーブ灰色粘土（約25~50cm）
III 層	地山	オリーブ灰色粘土

※ 下層確認のため一部で深掘りを行い、現況面より4~5m掘削してみたところ、T 2ではII b層とIII層の間にII c層（オリーブ灰色粘土）、II d層（暗オリーブ灰色粘土）を確認した。

### (4) 調査の状況（第10表、第21図、図版15）

調査対象地は、旧茅戸池の埋め立てに伴う廃土（I層）が、丘陵側で約1.7m、旧茅戸池中火付近では約3.5mと厚く堆積している。調査は廃土を取り除かずに、そのまま現地表面から掘削しているため、地山（III層）は部分的に4~5m深掘りして確認したにすぎず、遺構を検出することはできなかった。遺物は、T 1のII a層中より土師器片1点を検出しているが、摩滅した小破片のため詳細な帰属時期などは不明である。なお、T 2で検出されたII c層は中尾茅戸遺跡A地区で確認された古墳時代~近世遺物包含層、II d層は古墳時代遺物包含層に相応するものと思われるが、今回の調査では遺物を検出することはできなかった。

### (5) 出土遺物

土師器片1点を検出しているが、小破片のうえ摩滅が激しいため図化できなかった。

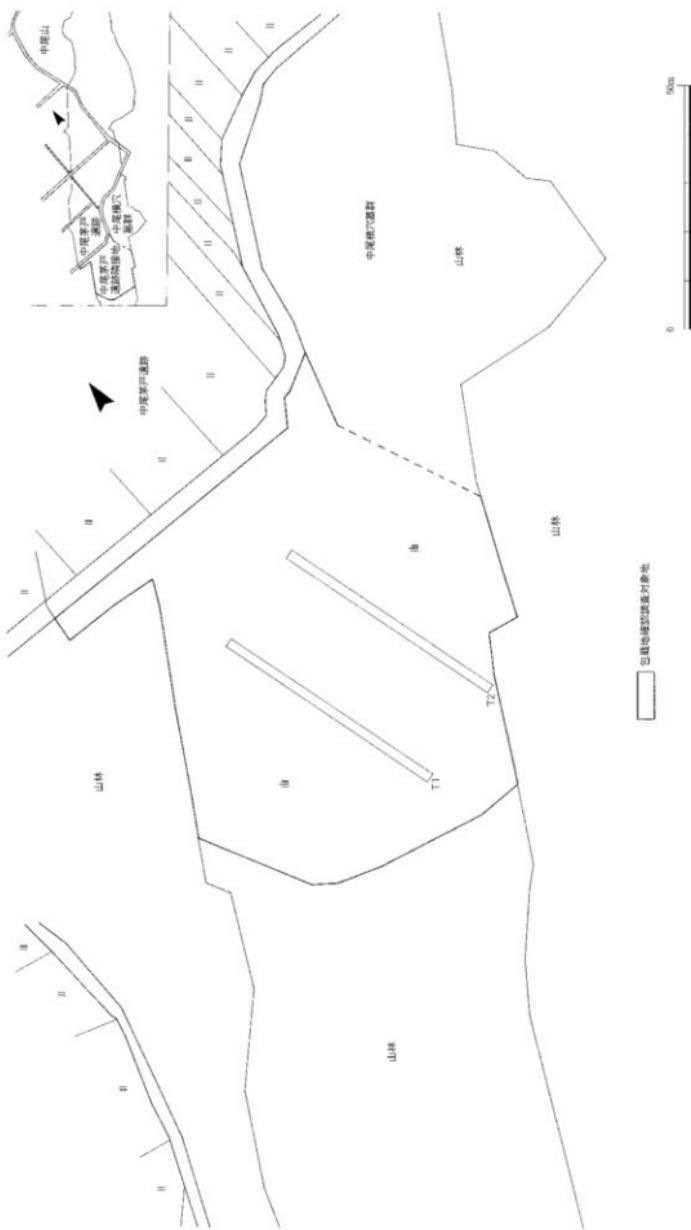
### (6) 調査の結果（第21図）

調査対象地は、北側に接する谷平野で検出された古墳時代の集落遺跡との関連が想定されていたが、今回の調査では、遺構及び遺物を検出することはできず、中尾茅戸遺跡の遺跡範囲の拡張などを確認することはできなかった。

（長瀬 出）

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	I層	II a層	II b層	III層	遺構
T 1	50	1.3		土師			
T 2	50	1.2					

第10表 中尾茅戸遺跡トレンチ一覧



第21図 中尾茅戸・玉川接続地(茅戸・玉川接続地)トレンチ位置図 (1 : 10,000)

## IV 自然科学分析

### NEJ-17埋蔵文化財包蔵地出土貝類同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

NEJ-17埋蔵文化財包蔵地は、仏生寺川中流部に左岸から合流する支流によって、深原から矢田部にかけて形成している支谷内の谷底平野に位置する。本遺跡では、標高約2.8m付近から貝化石の集中層が検出されている。この貝層は、標高および周辺地形から繩文海進時に形成したと考えられている。そこで、今回は、貝の種類を調べて当時の環境を検討するために、貝類同定を実施する。

#### 1. 試料

試料は、5トレンチ深掘から採取された貝類である。この中には、砂が付着した貝類が多数混入している。

#### 2. 分析方法

貝類に付着している砂分を水洗して除去し、乾燥させる。乾燥後、試料を肉眼およびルーペにより種と部位の同定を行う。なお、同定は金子浩昌先生（元早稲田大学）の協力を得た。

#### 3. 結果

出土した貝類の分類群一覧を第11表に、同定結果を第12表に示す。以下、検出された種類ごとに記載する。検出された種類は、5日9科11種である。なお、分布・生息域に関しては、奥谷ほか(2000)を参考とする。

##### ・イボウミニナ

開放的な内湾の潮間帯中部～下部にかけて生育する種類である。成貝27個体、幼貝6個体検出される。最大殻高33.42mm。

##### ・カワアイ

内湾の潮間帯・泥地にかけて生育する種類である。成貝37個体、幼貝1個体検出される。最大殻高27.61mm。

##### ・ムギガイ

北海道南部以南の潮間帯～潮下帯岩礁にかけて生育する種類である。2個体検出される。殻高10.14mm、10.44mmである。

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
盤足目	Order Discopoda
ウミニナ科	Family Batillariidae
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>
フトヘナリ科	Family Potamididae
カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) djadariensis</i>
新生腹足目	Order Neogastropoda
フトコロガイ科	Family Columbellidae
ムギガイ	<i>Mitrella bicincta</i>
二枚貝綱	Class Bivalvia
翼形亞綱	Subclass Pteriomorpha
フネガイ目	Order Arcida
フネガイ科	Family Arcidae
サルボウガイ	<i>Scapharca kagoshimensis</i>
カキ目	Order Ostreida
ナミマガシワ科	Family Anomiidae
ナミマガシワ	<i>Anomidae chinensis</i>
異齒亞綱	Order Heterodonta
マルヌレガイ目	Order Veneroida
ハナシガイ科	Family Thyasiridae
マルハナシガイ	<i>Leptaxis ferruginosus</i>
ニッコウガイ科	Family Tellinidae
イチョウシラトリ	<i>Merisca capsoides</i>
マルヌレガイ科	Family Veneridae
シラオガイ	<i>Circe (Radicirce) sulcata</i>
アツリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
ウスハマグリ／シロウスハマグリ	<i>Pitar japonicus / P. noguchi</i>
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>

第11表 NEJ-17検出貝類の分類群一覧

地点	採取日	分類群	部位	数量	計測値 (mm)	分 布	生息域
5トレンチ深掘	2002.07.17	イボウミニナ(成貝)	本体	27	殻高：10.0± ～33.42	北海道南部以南の インド・西太平洋域	やや開放的な内湾の 潮間帯中部～下部、泥底
		(幼貝)	本体	6			
		カワアイ	(成貝)	37	殻高：4.0 ～27.61	房総半島・山口奥北瀬以南、 インド・西太平洋域	内湾の潮間帶、泥地
			(幼貝)	1			
		ムギガイ	本体	2	殻高：10.14, 10.44	北海道南部以南	潮間帶～潮下带岩礁
		サルボウガイ	左殻	27	殻長：6.20 ～56.31	東京湾から有明海、沿岸州南部 ～韓国、黄海、南シナ海	潮下带上部～水深20mの 砂泥底
			右殻	24			
			破片	6			
		ナミマガシワ	左殻	1		北海道南部以南の西太平洋	水深20m以浅の岩礁底
		マルハナシガイ	左殻	1		相模湾～九州、日本海西部	水深10～50mの砂泥底
		イチョウシラトリ	右殻 破損1 不明 破片3		殻長：4.73 ～21.11	北海道南西部以南、 東南アジア、インド洋	内湾・済奥部や河口部の 潮間帶中下部泥底
		シラオガイ	左殻	9	殻長：22.41 ～44.18	房総半島以南、日本海西部、 インド・西太平洋	潮間帶下部～水深20mの 砂底
			右殻	16			
		アサリ	右殻	2		北海道～九州、朝鮮半島、 中国大陸沿岸	潮間帶中部～水深10mの 砂礫底
		ウスハマグリ／ シロウスハマグリ	左殻	1	殻長：18.20	ウスハマグリ：房総半島～九州 シロウスハマグリ： 相模湾～九州、日本海西部	ウスハマグリ： 水深5～50mの細砂底、 シロウスハマグリ： 10～100m
		ヤマトシジミ	左殻	1	殻長：26.79	本州～九州	河口汽水域の砂底
		不明	破片	多數			

第12表 NEJ-17貝類同定結果

・サルボウガイ

東京湾から有明海、沿岸州南部～韓国、黄海、南シナ海の潮下带上部～水深20mの砂泥底に生育する種類である。左殻27、右殻24、左右不明破片6検出され、左殻と右殻がほぼ同数検出される。殻長6.20～56.31を測り、成貝だけでなく、若貝もみられる。

・ナミマガシワ

北海道南部以南の西太平洋の水深20m以浅の岩礁底に生育する種類である。左殻1のみ検出される。

・マルハナシガイ

相模湾～九州や日本海西部の水深10～50mの砂泥底に生育する種類である。左殻1のみ検出される。

・イチョウシラトリ

北海道南西部以南、東南アジア、インド洋の内湾奥部や河口部の潮間帶中下部泥底に生育する種類である。右殻1、左右不明破片3検出される。右殻は、一部破損している。殻長は、4.73～21.11mmを測る。

・シラオガイ

房総半島以南と日本海西部、インド・西太平洋の潮間帶下部～水深20mの砂底に生育する種類である。左殻9、右殻16検出される。殻長は、22.41～44.18mmを測る。

・アサリ

北海道～九州、朝鮮半島、中国大陸沿岸の潮間帶中部～水深10mの砂礫泥底に生育する種類である。右殻2検出される程度である。

・ウスハマグリ／シロウスハマグリ

ウスハマグリが房総半島～九州の水深5～50mの細砂底に、シロウスハマグリが相模湾～九州や日本海西部の10～100mに生育する種類である。左殻1検出される。殻長は、18.20mmを測る。

・ヤマトシジミ

本州～九州の河口汽水域の砂底に生育する種類である。左殻1検出される。殻長は、26.79mm。

#### 4. 考察

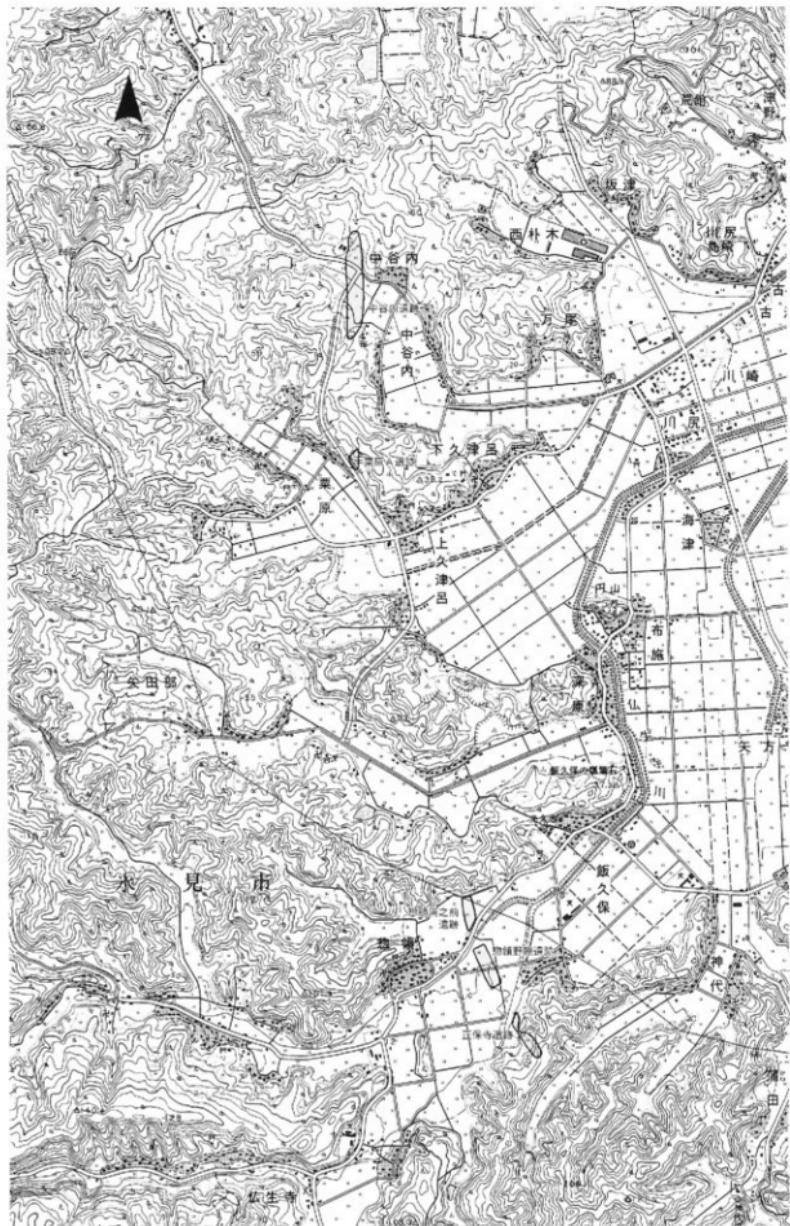
検出された貝の中で、マルハナシガイ、ウスハマグリなど少数の深度の深い棲息域の貝種を除くと、他の種類はいずれも内湾の浅海砂泥底を生息域にする。これら内湾砂泥底に生息する種類の大部分は、当時の水見湾奥に棲息していた貝種とみてよいであろう。特にサルボウガイが多産していることは、本種がこのような環境下に棲息する代表的な種類であり、水域環境の様相を良く示していると言える。

以上のことから、本貝層が自然に形成したものと仮定すると、浅い海域が存在していたことが伺え、当時遺跡周辺は内湾のような環境であったと推測される。今後、放射性炭素年代測定による本貝層の形成年代の把握、珪藻分析による堆積環境変遷の検討、さらに本貝層と同時異層の分布状況などを把握することで、本遺跡周辺のより詳細な環境復元を行うことが可能になると考へる。(植木 真吾)

## V 小 括

- 平成14年度に行った4箇所の埋蔵文化財包蔵地と5遺跡の調査の結果は、次のとおりである。
1. N E J-15埋蔵文化財包蔵地では、第1造構面で中世、第2遺構面で古墳時代の集落を確認し、惣領野際遺跡とした。本調査対象面積は14,200m<sup>2</sup>で、2面あるため延べ面積は28,400m<sup>2</sup>である。今後の調査によって、周辺の古墳群との関係や中世における集落の様相が解明されることを期待したい。
  2. N E J-16埋蔵文化財包蔵地では、第1造構面で古代・中世の集落、第2造構面で弥生終末期～古墳時代前期・縄文の集落を確認し、惣領浦之前遺跡とした。本調査対象面積は9,900m<sup>2</sup>で、2面あるため延べ面積は19,800m<sup>2</sup>である。隣接する惣領野際遺跡と合わせて検討することにより、仏生寺川流域の丘陵先端から平野部における開発過程の一端が解明されるであろう。
  3. N E J-17埋蔵文化財包蔵地では、今回の調査範囲内に遺跡は確認されなかった。
  4. N E J-18埋蔵文化財包蔵地では、今回の調査範囲内に遺跡は確認されなかった。
  5. 正保寺遺跡では、調査対象地の南西半分において遺跡の広がりを確認した。丘陵斜面では2箇所の平坦面を中心として遺跡を確認し、丘陵裾で中世の遺構面を検出した。上位平坦面の南端部では基壇状の盛土とピット1基を確認した。地名の由来と推測される社寺との関連も考えられるが、詳細の解明は今後の調査を待ちたい。本調査対象面積は8,600m<sup>2</sup>で、丘陵斜面（古代）、丘陵裾（中世）とも单層である。
  6. 粟原A遺跡では、丘陵斜面から裾にかけて遺跡の広がりを確認した。古代单層で、本調査対象面積は3,100m<sup>2</sup>である。なお、今回の調査対象地から除外された市道より南側の谷平野部にも遺跡範囲が広がる可能性があり、今後調査などによる確認が必要である。また、近隣の粟原B遺跡との関連も今後の調査課題とされる。
  7. 中谷内遺跡では、丘陵から平野部にかけて遺跡の広がりを確認した。北側丘陵斜面から丘陵裾にかけては中世の遺構面を確認した。平野部では古墳時代・古代・中世にわたる2～3面の遺構面を確認した。南側の丘陵裾では縄文・中世の2面の遺構面を確認した。本調査対象面積は42,870m<sup>2</sup>で、うち遺構面が1面の範囲は7,290m<sup>2</sup>、2面の範囲は23,270m<sup>2</sup>、3面の範囲は10,920m<sup>2</sup>で、延べ面積は86,590m<sup>2</sup>である。今後の調査においては、平野部では縄文から中世に至る集落遺跡の展開を追うことが可能と推測され、丘陵斜面から裾部にかけては、立地条件から中世山城等特殊な性格をもつ遺構が存在することも考えられる。
  8. 中尾横穴墓群と推定されていた調査対象地では、今回の調査範囲内に遺跡は確認されなかった。
  9. 中尾茅戸遺跡に隣接する茅戸池跡地は、当初中尾茅戸遺跡の広がりが予想されたが、今回調査した範囲では遺跡の広がりは確認されなかった。
  10. N E J-17埋蔵文化財包蔵地では、泥岩層まで深掘りした際に泥岩層直上にあった貝層から採集した貝類の同定を行った。その結果、少數の深度の深い生息域の貝類を除いては、内湾の浅海砂泥底を生息域とする貝類に同定され、このことから當時遺跡付近は内湾のような環境であったと推定された。検出した泥岩層は中新世後期から鮮新世中期（600～300万年前）に堆積してできた阿尾泥岩層と考えられ、同定試料を採取した貝層は縄文海進期に形成された層と推定される。今後、当貝層採集試料の放射性炭素年代測定等により、周辺のより詳細な環境復元が可能になると考えられる。

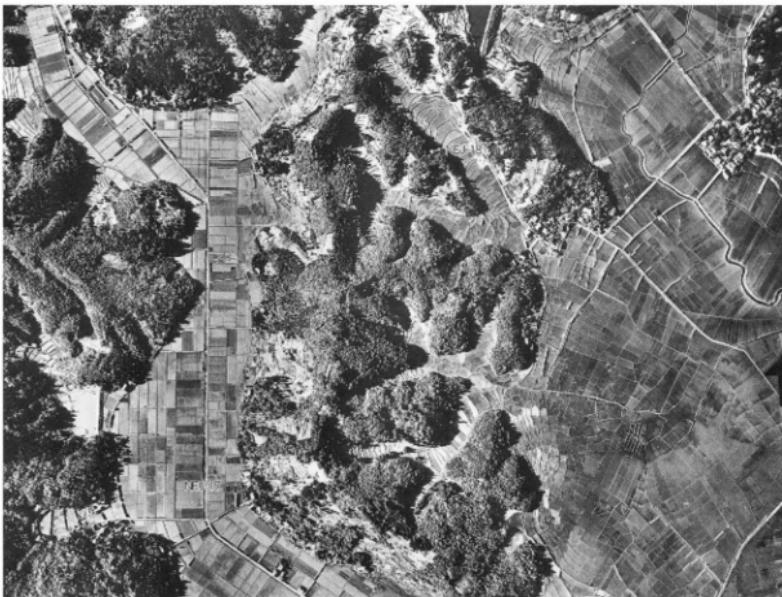
（越前慎子）



第22図 今回の調査により新たに確認された遺跡の位置 (1 : 25,000)

## 引用・参考文献

- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
- 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- 上原真人 1994「日常生活の道具 入れもの」『季刊考古学』第47号
- 大川 清他 1996『日本土器事典』雄山閣
- 奥谷喬司・窟寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・上田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷巖・速水 格・堀 成夫・松隈明彦(2000)『日本近海産貝類図鑑』、奥谷喬司編、1173p., 東海大学出版会。
- 小田本治太郎 1989「北陸東部における古墳開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
- 川端 誠 1996「北陸地方の木製食器の概要」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器』
- 久々忠義 1986「富山県における「月影式」土器について」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編、石川考古学研究会
- 小島清文 1962『氷見市地名考』氷見報知新聞社 柳元吉郎
- 国土地理院 1995「1:25,000 地形図 飯久保」  
1996「1:50,000 地形図 氷見」  
1998「1:25,000 地形図 氷見」
- 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原護摩堂遺跡調査報告(遺物編)』
- 寒川 旭 1992『地震考古学—遺跡が語る地震の歴史—』中公新書
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』
- 瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史Ⅳ』
- 高橋沿二 2000「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究X X II』庄内式土器研究会
- 竹内理三他 1979『角川日本地名辞典 16 富山県』角川書店
- 田島明人 1986「IV 考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡 I』  
石川県埋蔵文化財センター
- 上野 章 1972『6.弥生時代 附 古式土器』富山県史 考古編』富山県
- 富山県埋蔵文化財センター 2000『富山県埋蔵文化財包蔵地図』平成12年加筆訂正
- 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1964『富山県水見地方考古学遺跡と遺物』
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989『越中上末塚』
- 中葉博文 1980『氷見市地名の研究』日本地名研究所
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編】
- 伯水正英 1963『上庄村史』上庄村史編纂委員会
- 氷見市教育委員会 1998『朝日山城跡一七軒町地区急傾斜地崩壊防止工事に先立つ発掘調査ー』  
2001『新保南遺跡』  
2001『柳田布尾山古墳 第3次調査の成果』
- 氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ 1994年度』  
1996『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ 1995年度』
- 氷見市編さん委員会 2002『氷見市史7 資料編五 考古』  
1999『氷見市史9 資料編七 自然環境』
- 森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- 青岡康暢 1991『日本海城の土器・陶磁 [古代編]』六興出版
- 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



(1953年11月撮影)



(1952年11月撮影)

図版1 NE J-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真



図版2 NEJ-15・16・17・18・正保寺遺跡航空写真

(2000年5月撮影)



(1952年11月撮影)



(2000年5月撮影)

図版3 栗原A遺跡・中谷内遺跡航空写真

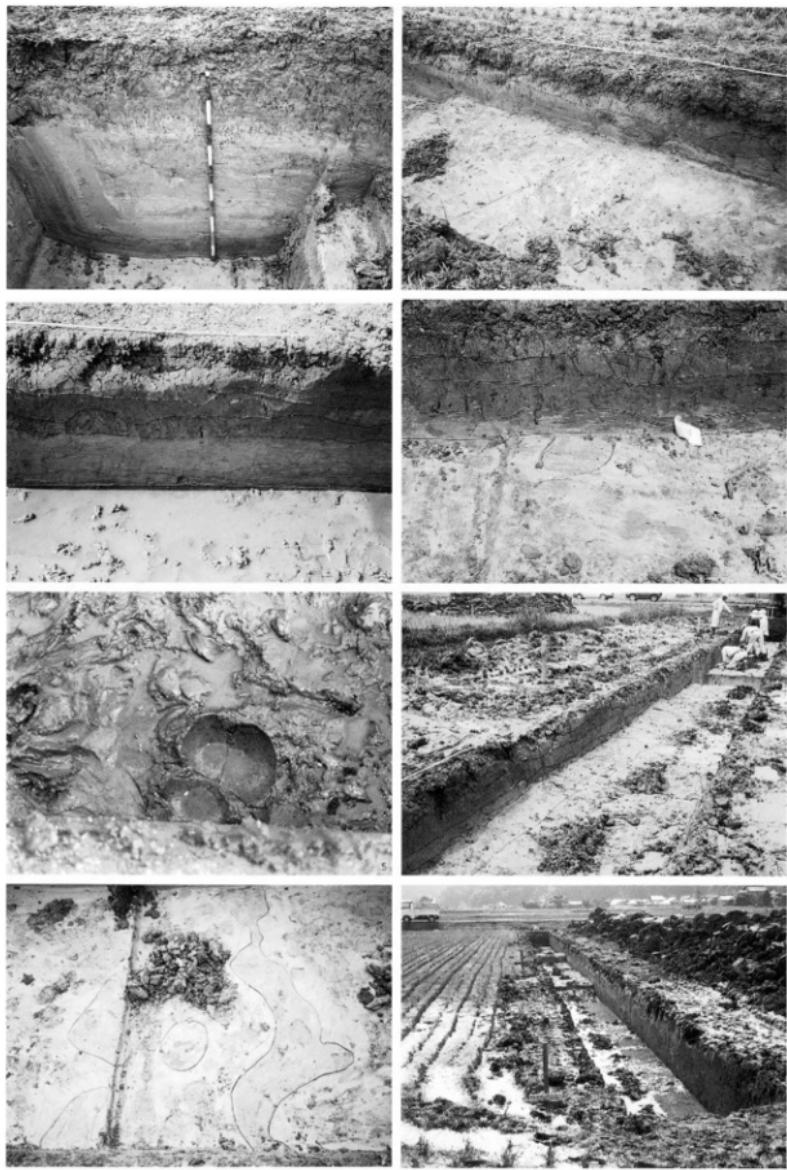


(1953年4月撮影)

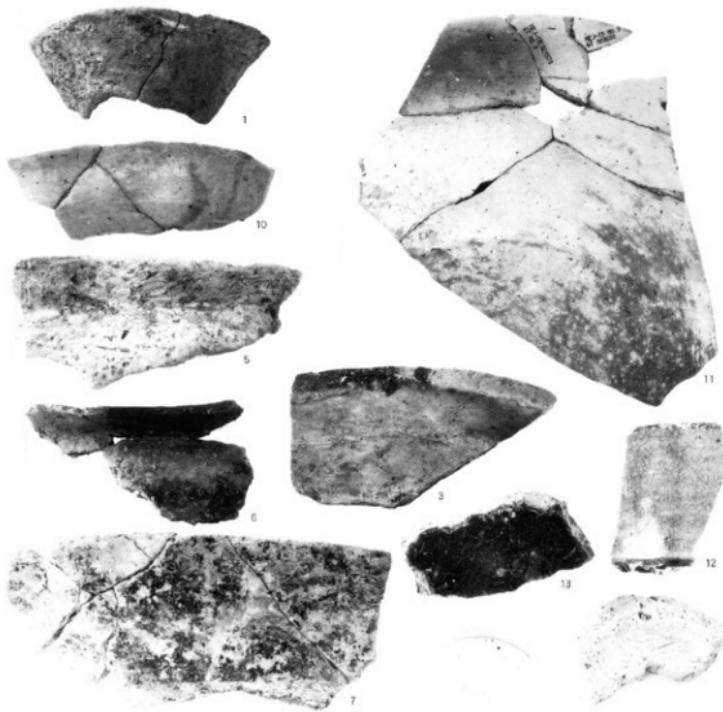


(2000年5月撮影)

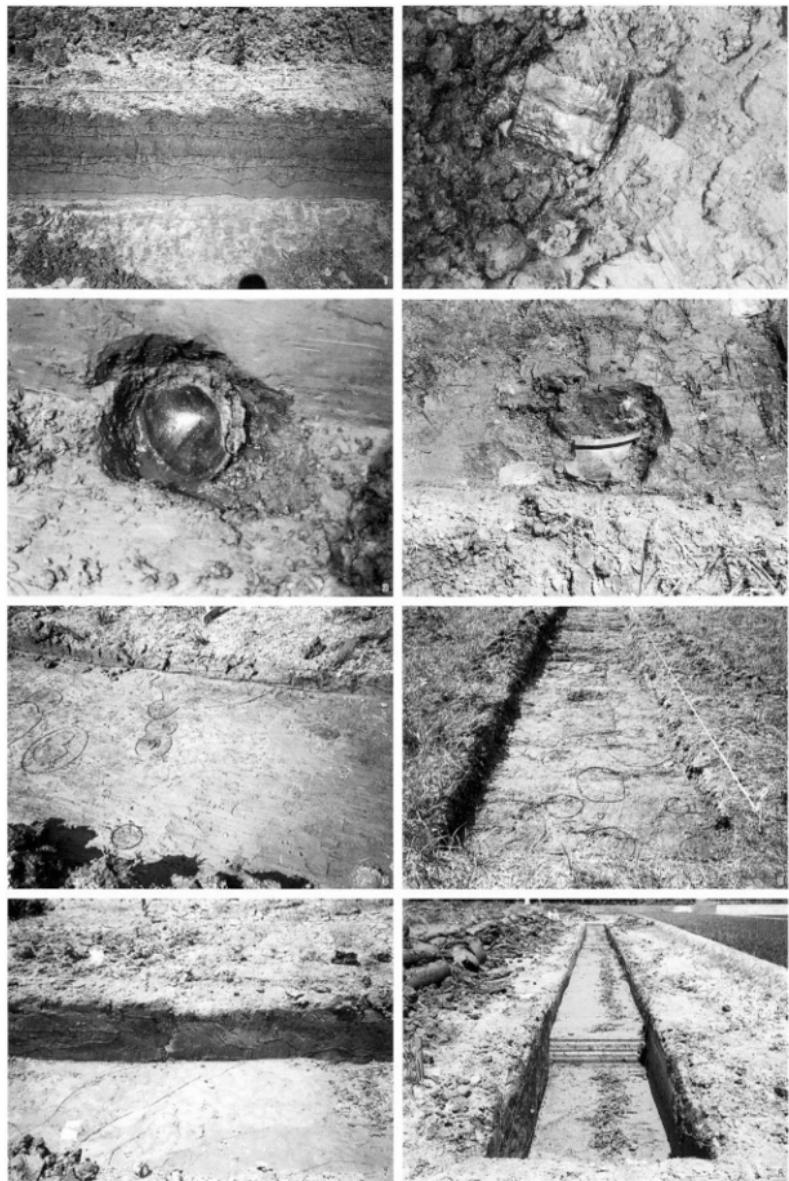
図版4 中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡航空写真



図版5 NEJ-15 1. T1土層 2. T2土層 3. T4土層 4. T9土層 5. T6遺物  
6. T7作業風景 7. T10遺構 8. T12全景



図版6 NEJ-15出土遺物（写真中の番号は第4図に対応）



図版7 NE J-16 1. T2土層 2. T4遺物 3. T4遺物 4. T6遺物 5. T6遺構  
6. T8遺構 7. T9土層 8. T10全景



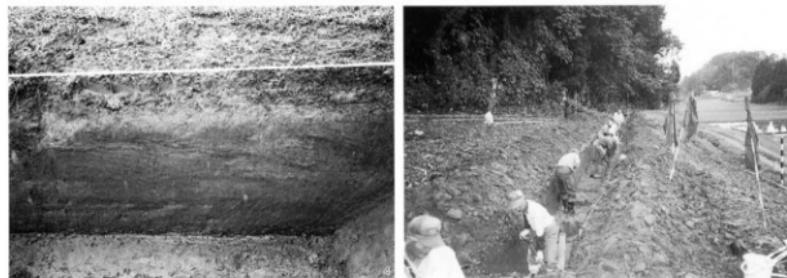
5



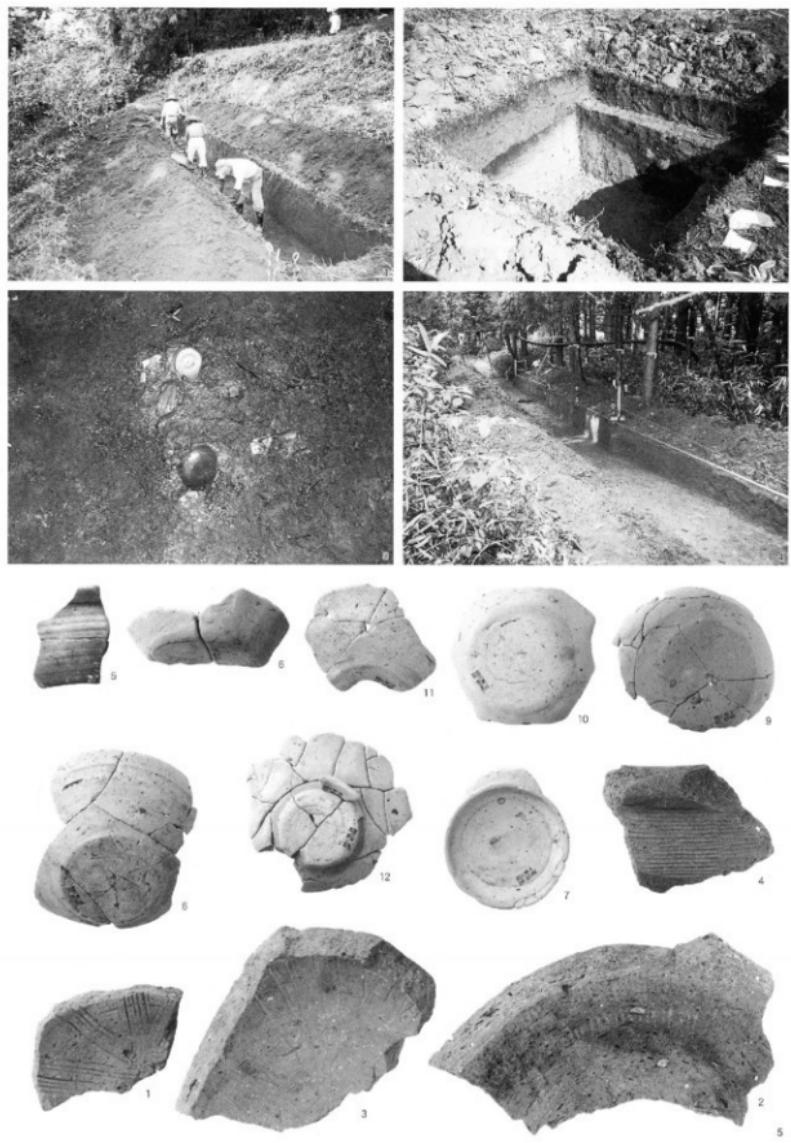
6



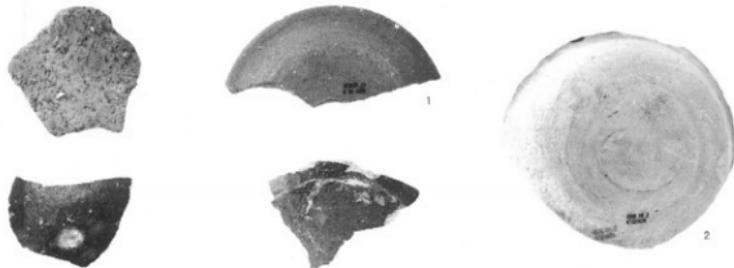
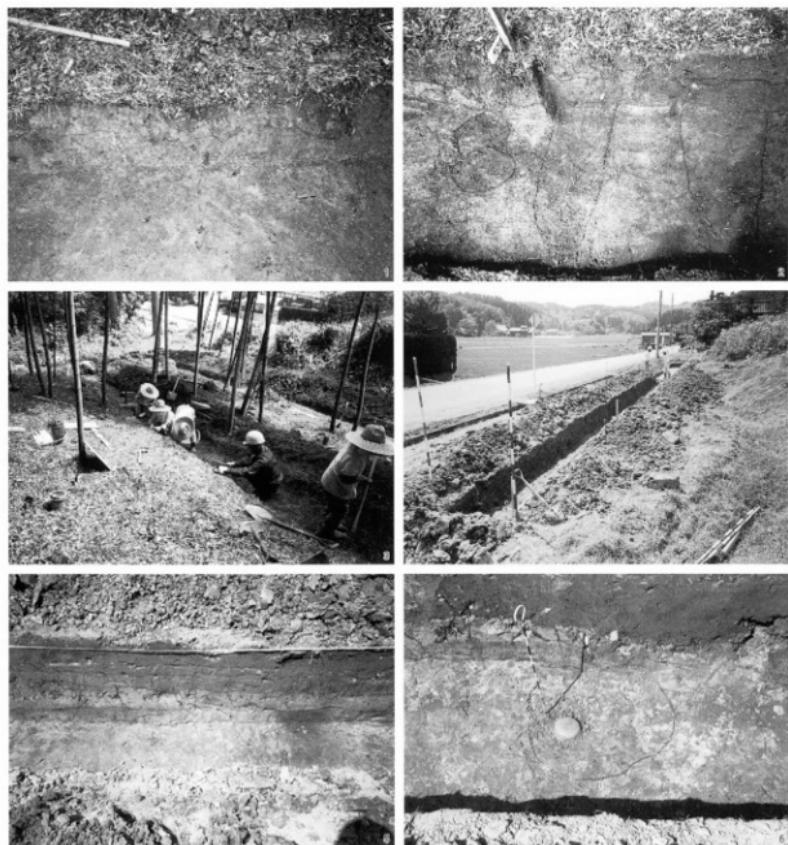
図版8 NEJ-16出土遺物（写真中の番号は第6図に対応）



図版9 NEJ-17 1. T2全景 2. T5土層 3. 出土遺物 (写真中の番号は第7図に対応)  
NEJ-18 4. T4土層 5. T7作業風景 6. 出土遺物



図版10 正保寺遺跡 1. T10作業風景 2. T12全景 3. T20遺物 4. T21全景  
5. 出土遺物 (写真中の番号は第13図に対応)



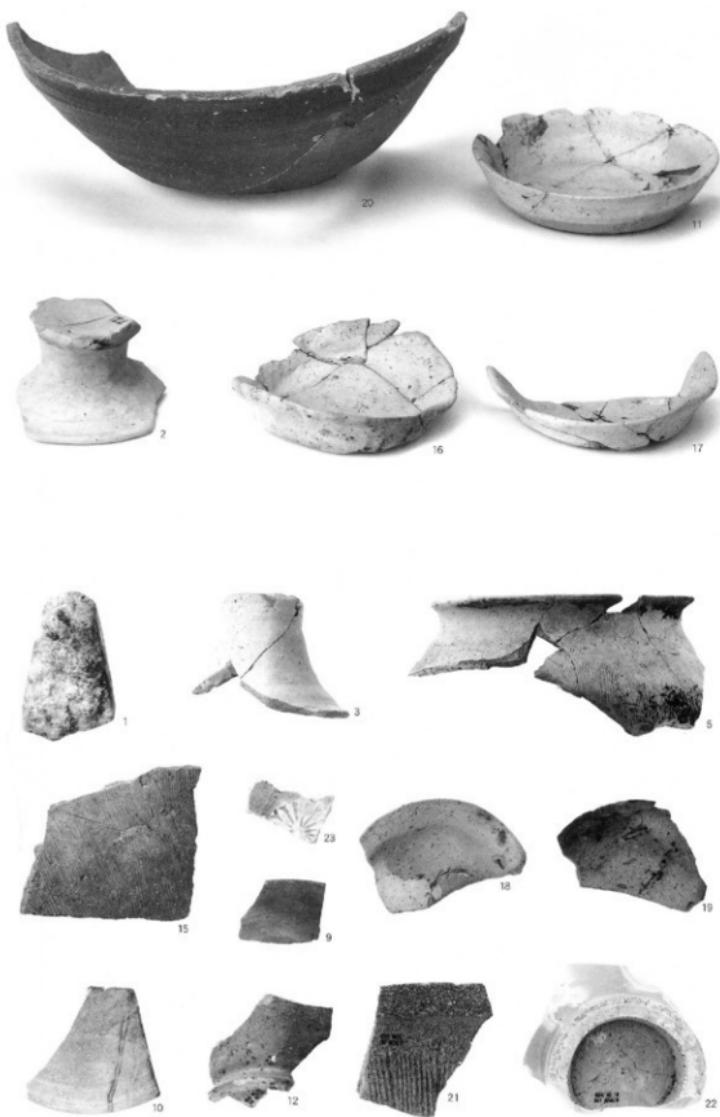
図版11 粟原A遺跡  
 1. T1土層 2. T2造構 3. T2作業風景 4. T4全景  
 5. T4土層 6. T4造構と遺物 7. 出土遺物 (写真中の番号は第14図に対応)



圖版12 中谷內遺跡  
 1. T2遺構 2. T5土層 3. T8全景 4. T10土層 5. T10遺構  
 6. T15遺構 7. T16全景 8. T20遺構與遺物



図版13 中谷内遺跡 1. T24土層と遺構 2. T30作業風景 3. T30土層 4. T30遺構  
5. T34全景 6. T35遺構 7. T38土層と遺構 8. T40土層



図版14 中谷内遺跡出土遺物（写真中の番号は第19図に対応）